325
378b

始

禪學質疑解答

原田祖岳著

大正
7. 5. 29
購求

325-3783

序

之を舒ぶるときは八萬の法門無量の妙義となり、之を卷くときは一法片義の他に度與すべきものなし。何物か恁麼に奇怪なる、教家には是を眞如佛性と道ひ、祖門下には是を破木杓と稱す。即ち人々具足の眼横鼻直なるものなり。還て識得すや。識得徹すれば彼れ曾て怪をなさず。それ或は未だ然らざれば永劫彼れに魔魅せらるゝことを免れず。智者は彼れを識破して直下安泰なりと雖も、不肖者は此關捩子を知らず、漫りに言跡を尋ね、形影を

逐ふて休することなし。却つて思想の進歩と云ひ、哲學の造詣と云ひ、人格の向上と云ひ、信念の成立と談ずるも、尚是れ識浪情波の生死海中に漂蕩するものにあらざるはなし。況んや彼の但念水草の禽獸生活に似て、衣食住にのみ東西し、虚榮空想にのみ奔走するものに於てをや。

佛祖之を憐んで四十九年の慈化を示し、二千餘年の度生を垂れ給へるは、決して教理の深淺を戰はして、人我の妄見を逞しふせしめんとするにあらず、直ちに彼の怪原を截つて、即處に自在ならしめんとするにあり。今此一冊子、半百の疑問に解答をなすも、斷じて問者の識浪情波を增さしめて、分別妄想の生死海に溺沒せしめんとするにあらず。願くは其疑着の起れる好期を捉へて、以て直に彼の怪異の本原を打破せしめんとするに外ならざるなり。

されば此小冊子を讀破し、以て眼睛紙背に透る底の人は、須らく此冊子を拋下し、亦た一切の宗教、哲學書をも燒却すべし。而して直に禪關を打開して、彼の怪異の正體

を活捉するの那人となるべきを信ぜんと欲する者なり。若し夫れ或は未だ然らざれば、何の日か安心立命の期あらんや。請ふ、奮勵一番せよ。

大正六年六月吉祥日

梅雨霏々たる駒澤學舎にて

原田祖岳識

目次

一、參禪修行の第一歩……一
　一、勝手禪に陷る勿れ
　二、禪は學問に非ず
　三、理論と實際
　四、正師に實參せよ
二、參禪の心得……七
　一、素養は要らぬ
　二、生きた禪書に倚れ
三、學道の用心……一一
　一、須らく師家に參見すべし
　二、佛法に無理なし
　三、坐禪と健康

四、我見を去れ

四、洞上安心の眼目(佛戒論)……二一

一、經律論の三藏
二、戒定慧の三學
三、縱に見たる三學
四、横に見たる三學
五、戒體の發得
六、正傳の佛法
七、戒の體相用
八、十六條戒の圓融
九、修證義の由來
十、安心決着の處

五、曹洞宗通俗安心の標準……四六

一、一書即一切書
二、修證義に就て

三、佛戒の妙旨

六、隨宜の信仰問題……四九

一、把住と放行
二、歸依三寶

七、禪戒の關係と宗門安心の的處……五一

一、禪戒一致の方面
二、禪戒の別旨に就て
三、何の不可かあらん
四、佛法は等同一如なり

八、一佛稱名の可否と三寶稱名……五八

一、釋尊を稱名佛となす證據なき事
二、三寶稱名は我宗の特色
三、三寶禮は入道の初門
四、佛祖の眞精神に參ぜよ

九、曹洞宗に於ける異安心……六七
一、禪風落地は法螺禪者の罪
二、信徹の佛性を體得せよ
一〇、所謂洞宗法王敎の批評……七〇
一、法王敎を讃歎す
二、我が正傳の佛法の大意
三、我が正法と法王敎と契合するや否や
四、三種成佛義を評す
五、疑惑生君に御注意
六、高田道見師に御注意
一一、洞宗本尊の不定に就て……八七
一、現代の洞宗
二、既往の洞宗
三、禪宗の本旨
一二、洞宗所依の經典……八九

一、潙山仰山の問答
二、所位相應の取扱
一三、臨濟禪と曹洞禪……九一
一、臨濟將軍曹洞土民
二、自勝他劣の僻見なし
三、看話默照共に弊あり
四、向上の眞風に差別なし
一四、現代相似禪評論の評論……九九
甲、先づ禪を大觀せよ
一、緒　言
二、靜慮禪
三、迷悟禪
四、自性禪
五、圓融一貫の大道
乙、現代相似禪評論に對する所感

一、緒　言
二、著書の內容
三、著者の境涯觀
四、功罪兩途あり
五、結　評

一五、修行上の要心に就て……一三一
一、正師に參ぜよ
二、放身捨命底の修行

一六、公案は超言思に體得せよ……一三三
一、憤然一番の覺悟
二、聽取せりや否や

一七、眞悟か僞悟か……一三六
一、禪の目的は生死透脫
二、異中同辨の眼

一八、理想禪と實際禪……一三九

一、向上非佛の禪
二、實際禪
三、萬種の誘引法

一九、悟りに差別ありや否や……一四七
一、閑文學に過ぎず
二、佛祖門下淺深なし

二〇、機類と禪心との關係……一四八
一、那伽大定の見解
二、相對界の事
三、絕對界より
四、圓融無碍

二一、悟道と學解の差別……一五三
一、學問の有無は證道の內容に差別を生ずるや
二、學問の有無により化導上便不便の別ありや

二二、外道禪と佛法禪……一五九
一、兩禪の共通點
二、兩禪の根本差異
三、玉石を混合する勿れ
二三、滅却心頭火自凉……一六四
一、安禪の二字が眼目也
二、火自凉の端的
二四、禪者の授記觀……一六七
一、同中異辨の眼を具せよ
二、易學及基敎の豫言
三、通佛敎の授記の說
四、禪より見たる授記
二五、禪と因果說……一七五
一、迷悟一枚

二、信じて實行せよ
二六、三世因果論……一七八
一、淺識眼から起る疑難
二、猛然眞僞の肉を引むけ
三、佛敎の根本問題
二七、懺悔と業相續……一八四
一、懺悔の大綱
二、第二義門の懺悔
三、第一義門の懺悔
四、第一義門と第二義門の一致點
五、結　論
二八、引導と追悼の意義……一九一
一、心地未了者の場合
二、巴陵の三轉語

二九、佛教の梵我觀……一九三
一、隨他意の教
二、無我の大我教
三〇、己れとは何ぞや……一九七
一、「己れ」と「等」の意味
二、語なきに加かず
三一、中年の出家志求者に答ふ……一九九
一、發心の志操を省みよ
二、女人禁制と僧尼同修
三、女子得度の法式
三二、現代に釋尊出世せば……二〇八
一、先づ因緣所生教を信ぜよ
二、釋尊出世の目的
三、原始時代の修行及布教法
四、佛智見に開示悟入
三三、悉有佛性に就て……二一七
一、佛性の活三昧
二、情緒や理性は佛性に非ず
三、妄想の窠窟裡を出でよ
三四、耶蘇教より佛教へ……二二一
一、活きた宗教の活きた精神
二、佛教の精神
三五、洞宗信者の念佛……二二四
一、改むべし
二、改むべからず
三六、須らく自他力を超越せよ……二二九
一、禪門は自力宗に非ず
二、利人鈍者を擇ばず

三七、禪淨安心の同異點……二三四
一、佛教々理の概觀
二、佛教々理の大要
三、淨土眞宗の安心
四、洞宗安心の要義
五、兩宗の比較
六、結　勸
三八、獨處閑居の可否……二五〇
一、離言自在の妙旨を知れ
二、矛盾即一貫の理
三九、禪僧の活拳頭……二五五
一、宗風を擧揚せよ
二、理論方法の第一義
三、理論的方面の第二義門
四、時處位

五、實際的方面
四〇、靈魂の有無に就て……二六七
一、五六年間の苦修を要す
二、他人の小問題に非ず
三、即今靈魂ありや
四、業及業相續とは何ぞや
五、素凡夫と靈魂問題
六、曹洞禪と靈魂問題

一、參禪修行の第一歩

問 近來大分禪風が盛になりましたが、私にはどうも意に滿ちた禪に出遭ひません。徹底せる禪を求めて修行したいと思ひますが、何卒御指示を願ひます。（空外道人）

答 方今頻りに禪〳〵と云ふことを聞く樣になつて、苟くも精神修養とか、宗教を求むるとか云ふ人は、佛教信者であると基督教信者であるとに拘はらず、又既成宗教にも依らずして、一種の精神的訓練として禪を口にするやうになつて來た。

是等の人々は皆多少なりとも禪を聞き、又禪書を讀み、中には一週間位坐禪をしたと云ふ人もあつて、坐禪に關する事を人にも聞き、自らも云ひ、頻りに禪學々々と囀し立てゝ禪學の流行を見る樣になつたのは、一面から見れば頗る結構なことであると共に、一面から見れば禪に於ける大なる誤解をなして居る者が、十が八九あることを

見受けるのであるから、頗る困つた現象であると思ふ。

其の二三を例せば、曰く禪は之れ實行主義である、何でも唯努力して事に從へばそれが禪であると云ひ、或は只公案を考へるのが禪であると云ひ、或は只見性するのが禪であると云ひ、或は放縱で無頓着な生活をするのが禪であると考へ、或は佛祖の制規に從つて行住坐臥すれば其れが禪であると思ひ、或は少し許り有漏禪を修して、精神狀態が變化した、心臟の鼓動が聞ゆる樣になつた。線香の灰の落ちるのが耳に觸れるやうになつた。或は物に執らはれぬやうになつた。此等が禪である。天地一枚の眞境であると勝手次第に解釋して我れ禪を會せりとなし、甚だしきは是れによりて一夜作りの人生觀や宇宙觀を揑造し、以て此も禪に外ならず等と澄し込むで居る者が實に澤山ある。

二　禪は學問に非ず

此等の諸說は何れも禪ではない。勿論かゝる謬見を禪とする人もまんざら獨斷ではない。曾て若干の禪書を讀み、又所謂の禪學者の說法をも澤山聞いて居るが、こんな人に却つて斯る間違を澤山に見るのである。之は聞き手にも聞き損じがあり、讀み損ないが多くあるのであらうけれ共、其れよりも此の誤の由つて來る大なる原因は、實は聞者にあらずして、其の罪の大部分は說者にあるのである。

方今頻りに禪學書を讀まむとし、禪話を聞かむとする人あるが爲に、禪の修行全くなく、只禪語を多く學んだ人々が、勝手次第な禪を亂道するからである。故に禪に志し禪を聞かんとする人は、必ず大善知識の下で十年二十年參禪學道した人の話でなければ聞いてはならぬ。又禪書を讀まむとする者も同樣で、多年正傳の宗師に就て修行した人の著述にあらざれば、讀むではならぬと云ふことを確かに知らねばならぬ。

三　理論と實際

世人動もすれば、あの人は人格も高く、禪書も多年研究し、廣く古今東西の學を修め、堅き信仰と見識とを持つて居る人であるから、あの人の說ならば、あの人の著書

ならば、確かに禪學の指南として聞くに足り、讀むに足ると云ふ誤解を免れぬのである。成る程人格も高く、學識も深く、見識も立つて居れば、其の意味に於て立派で、人の師表となる可き人には相違ないけれども、其の立派な人であるからとて、禪にも眼が明かであると云ふ道理は斷じて有り得べからざる事である。

譬へば如何程立派な人でも、劍道の書を讀む丈で、人に劍道の師範となり得るのであらうか。何程頭腦の緻密な人でも、書道の書物を讀むだ丈で、人に手本を書き與へる事が出來るであらうか。如何に推考力に富める人でも單に兵法戰術の書を讀んだ丈で、實戰に臨むで指揮官となれるであらうか。

凡そ一切の事は大小に拘らず、皆實行實修して其の妙所を感得し、初めて其の道が我手に入るのである。況や心靈界の根本的大核心を摑む道である所の、佛祖最上の大禪定に於てをやではないか。決して禪書を三十年五十年研究した所で、其では禪の妙處は得られぬ。眞實實參實究する事多年の後にあらずんば、禪の何たるものかは決して解し得べきものではない。

四　正師に實參せよ

活佛眼なき者は、佛祖の言葉に轉ぜられて一點も自由の分なく、或は自由の分ありとしても勝手に杷放する者は、只其の凡見に引き寄せんとするに過ぎぬ。見よ佛祖時に妙解を重く說けば、禪は妙行を輕んずるものなりと誤り、時に妙行を重く示せば、禪は妙解を無視すると謬るではないか。

衲は嘗つて敎相の學に深く造詣し、尙禪學者（智識の意に非ず）に就き多年禪書を研究せる二三の大家に付いて、禪に關する意見を聞いた事があるが、實に笑止の見解の者が多かつた。近くは種々の雜誌の中に載つて居る諸大家の禪に關する說を見ても、此の人にしてかゝる誤解があるのかと、驚かざるを得ざる程の、謬說が澤山あるのである。

我開山道元禪師は「學道用心集」の中に各宗の祖師を批判して曰く、

其言是れ青うして、其語未だ熟せず、未だ學地の頂に至らず、何ぞ證階の邊に及ばんや。

と云はれて居るではないか。故に實參實悟せざれば如何に宗乘餘乘の研究深しと雖も、活祖意が分明するものではない。さればこそ、達磨も支那に、御開山も我國に佛法を傳へたと云ふのである。

斯く云へば禪は大變六ヶ敷ものになる樣だが決して左程六ヶ敷ものではない、只道元禪師の普勸坐禪儀の一卷も、道眼明瞭なる人から講釋を聞けば、解るだけは解る筈である、坐禪儀一卷といふも長過ぎる。其の要領を云へば。

心意識の運轉を停め、念想觀の測量を止めて作佛とも圖らず、兀然端坐する。

と云ふに外ならぬ。實に眼ある人より之を見れば、此二三句にて十分であるのである

けれ共唯素人が此の語を讀むで、此の語の表面丈を理解したのみでは、決して其甚深微妙の禪旨あることを認めることは斷じて不可能なものである。故に所謂の禪者に聞かず、又自分流義の見解に委せて置くことを絶對に止めて、確實に多年眞實修行した人に就て指導を仰ぎ其說のまに〳〵修行もし、疑惑も質すのを第一番に心得べき量見である。此一路を離れては斷じて眞正の禪は理解することの出來るものでなく、又證入することも出來るものではないのである。

二、參禪の心得

問　野生數年前一度禪門に志し、夏期講習會其の他の講演會に參聽したるも、吾人凡俗には難解にして入り難し、と斷念し、近來世間に稱道せらるゝ靜坐法に入り、師に就かず書により獨坐致し居り候も、雜念々頭に浮び來り、到底徹底的精神修養は覺束なしと斷念し、又元の禪門に入らむとするものに候。前輩に鑑み今回は其の第一着として素養を作らむ爲め、普勸坐禪儀、坐禪用心記等を研究せんとす、通解樣のものにして既刊の書あらば書名ならびに發行所名を御教示被下度候。（靜岡。不空山人生）

答　禪書の通解は種々有るだらうが一々未だ通覽せず。玉石分ち難い。貴下自ら書店へ尋ねらるが捷徑であらふと思ふ。それよりも是非注意しておかねばならぬ事があ

る。そは禪の修行に關する心得である。

一　素養は要らぬ

貴下は初め禪に入り中頃所謂の靜坐に出で、亦々禪に歸るとの事、而して今度は禪書に依り一往禪理の素養を作つてから禪の修行に入らんとせらるゝやうであるが、その考は是に似て甚だ不可である。禪はそう準備的學問を必要とせないのである。絶對に不必要と云ふのではないが、實は其の點はどうでも好いのである。禪書的の學問はしても仕方に依つて惡くはないが、愈〻修行と云ふときには、敢て必須的のものではない。

要は斯る素養はどうでもよいが、禪に志すものは最初から是非とも必ず正眼圓明の師に參じて、修行上の指南を受けねばならんのである。正師は一見して其の人に適當の方法を必ず授けて呉れる、其の指南に隨つて修行さへすれば素養など決しているものでない。古來の佛祖一人として禪に入るのには其の素養として、是非とも教相なり、宗乘なり、研究して置かねばならぬと示めされたのことはないのである。否な、素養のあるものは却て禪に入る障害となるものが多いと、誡められてあるのであるから、眞に禪的修養に入らむと欲せば先づ正師を求めて參禪問道せねばならぬ。百萬卷の禪書を讀破したからとて、決して禪が手に入るものでない。百萬卷の禪書を讀むよりは、正師家の下にて一週間接心した方が幾百倍得る所があるか知れん、但し自己流の靜坐等では不可である。

坐禪儀や用心集の特に深く教誡せらるゝ所は要するにこゝにあるので、文字禪を知るの要なく、直に實行禪に入れと云ふのである。但し自己流の禪は不可であるから正師を尋ねて其の指南の下に絶對に服從して、修養せよと云ふのである。

二　生きた禪書に倚れ

教理の研究も禪學の攻究も決して惡いと云ふのではない、一往其の素養を作るのも本より入道の原因ともなり心得ともなること勿論であるが、其の研究に入れば一に

は中々難解で厄介なことでもあり、二には其の研究で日が暮れてしまふと云ふ憂もあり、三に極めて正しい信仰を持つた人の解釋を仰がねば十か八九は似て非なる禪理を教へられ、其の儘悟りと云ふ恐るべき毒海に陷る恐が實に多いのである。然れども禪の修行には、先づ禪理の研究と云ふことが必須條件であるなら致し方もないが、正師と云ふ生きた禪書に就いて指南を受ける所に、安心して利人鈍者を擇ばず、誰でも修行することが出來るのであるから、一には時間の經濟でもあり、二は安心して修行に進むことができる。其れが捷徑である。

縱令ば　靜岡から（眞如の都）東京に來るに就いても、船もあれば汽車もあり、人力に乘るもよし、徒歩で來るもよし、同じ徒歩としても、疾走するも好く、閑歩しても來られる。その京間の地理風光土俗等を知るは是れ禪理研究の如きものである。斯ることを一往知り了つて、隨意の方法の下に旅行して、土地土地の地理等を研究しつ來るとしても、時々不明不安にも襲はるべく、大丈夫と思ふて旅行して居ても、其れが横道であつたり、或は誘惑者があつて途中で邪路に引き入れたり、或は路用（求道の志操）を奪ひ取る盜人にも出逢ふべく、斯る幾多の障害あることを知らねばならむ是れ素養を作つて自分流の考へで禪都に入らんとすれば斯る恐れがあるのである。

然るに正師の指南の下に禪に入れば、正師家は絕對有力の道案内であるから、何にも知らずとも、安心して隨つて行けば必ず無爲の都へ直入することが出來るのである、方今此の大事を知らず漫りに禪書の研究に日を送り却て邪路に陷り折角の求道の心操を無くする人の實に多いのを見るのである。だから見るとしても坐禪儀と學道用心集二卷の外は決して見るに及ばぬ。イヤ見ない方が宜い。婆心止み難く問外に脫線的答案になつた請ふ、掠せよ。

三、學道の用心

問　只管打坐して足痛を感すれば經行あり止靜あり、げに佛祖の大法には毫髮の無理あること無き奚然る

に體質虛弱なるものは如何に參禪辨道の志堅固なるも、强いて打坐するときは往々にして健康を害し、甚だしきに至つては疾病を生ずることあり。斯る者は到底見性悟道の見込無之哉、又吾人は此の場合常に彼の「一心欲見佛不自惜身命」の佛語を思へば法の爲には身命を賭しても猛進するが可なるや御敎示を乞ふ。

（城北。求道生）

答　好き御尋ねである。學道の用心を知ることは何よりも大切である。若し其の心を誤らんか勞して効なきのみならず、邪路に入つて毒海に墮在する。

一、須く師家に參見すべし

修行者の先づ最初に知るべきことは實に學道の用心である。だから開山も學道用心集一卷を著はして後昆に貽こされたのである。然れども彼書を熟覽拜讀しても、妄想多き者は猶ほ其の用心が徹底明了せぬものである。此に於てか右用心集にも親切に示されてある通り、必ず學道には正師に就いて用心を聞いて修行せねばならんのである。若し正師に逢ふこと能はざれば修行せない方が好い。邪師に就いて修行すれば必ず邪路に入り了るので、一度邪路に入れば縱令へ氣が付いても、中々邪境を出ることの出來ないものである。依て古人も此の道理を「染めてくやしや江戸紫に元の白地がましじやもの」と痛嘆せられたのである。そこで正師には仲々逢へず、邪師に就けば惡いから寧ろ無師にて勝手に禪書に依りて修行せんとするは、尙更危險である。依つて學道の眞最初に心得べきことは學道の用心である。而して學佛道の用心中最初に決擇せねばならんことは、正師を求むることである。

既に正師に逢着せば舊見識を一切捨てゝ、唯正師の指示のまに〳〵絕對に信順して、其し指示の如く行ひもて行くべきのみである。然れども其の指示に絕對信順するにしても、問ふべき妄想があるにも拘らず、問ふことを止めよと申すのでは斷じてない。不明不安のことは一點でも包藏して置くことは甚だ不可である。一切の妄想起るに隨つて、一々皆悉くさらけ出して申上げてしまはなければ修行は出來ん。而して師の指示を受けて、捨てよと云はるゝものは忌憚なく捨て、改良せよと云はるゝ事は卽事に改め、意に介すること勿れと云はるゝことは、斷じて意に介せず、斯くの如く

あれよと云はるゝことは直に斯の如くするでなければならん。自己の不分明の義は直に問ふて、決擇することを憚る樣では不可なると共に、師の指示に對して批評的頭が動く樣では斷じて不可である。要は赤兒の心になりきりて、教のまに〳〵修行するでなくては斷じて大法は手に入るものでない。

然れども、どうしても師の垂教に對して批評眼が動く樣では、或は其の師に道力不充分であるか、或は修行者自身が未だ道緣淺きかであるが、實に斯くの如きは學道の最も憂ふべき處であるから能く其の邊を熟考して、行者の道緣未熟の致す所なればよけれども、師の道力の不充分なるが爲なりと知れば、道力充實せる師を尋ねて隨身すべきである。法の爲めには決して〳〵人情や情實に縛せらるべきではない。併し其の師より外により好き師なきときは、邪師に非ざる以上は、其の師に就いて修行を致して其の長を取り其の短を見ざる樣にすべきである。但し正と邪と成就と未成就底とを見分けることは、中々容易のことでないけれども、是れを見分けるのが一番大切なる根本の用心必須の心得である。

二　佛法に無理なし

さて上來述べ來りし如き正師を求めるのが修行者の先決問題にして、既に正師に隨參することを得ば、修行上のことは師の指示に隨ふべきのみと云ふに外ならんのであるけれども、折角の御尋ねであるから、其質疑に就いて今少し具體的に話して見やふと思ふ。

御言葉の如く、佛祖の大道は毫髮の無理あることなし、一點でも無理あれば、佛祖の正法ではない。換言すれば毫髮の無理なきを佛法と云ふのである。世間法と佛法との相違點の要は、無理法と、無理法に非ざるとにありと云ふてもよいのである。然れども無理なき法といふことを直きに凡情で定めることは出來ぬ。兎角凡情では平面板的に活版刷的に法を見るの弊があるので困る。彼の釋尊の父王の願、國民全體の希望なる、王位に昇り仁政を行ふべき位置にありながら、出家入山し玉ふも釋尊としては

無理でない自然である。加葉の富を以て捨てゝ顧みず、十二頭陀行に入りしも加葉尊者には無理でない自然である。慈明の引錐、二祖の斷臂も無理でない自然である。六祖や洞山の母を捨てたるも、正受老人や普照和尚の晩年母に順孝なる、皆無理でない自然である。其の他憂國の士の身を捨てる、學者の學理研究に身を捨て家產を忘れるが如き皆無理でない自然の發露であり。法の運爲である。

凡そ大人は大事をなし中士は平生を全うし、小人は小事をなす決して無理でない自然の運爲である。彼の蟹は殼程の穴を穿つのが自然なるが如し。小中大學生にはそれ〴〵小中大學生相當の學科を授くるのは自然なれども、大學生に小學科を授け小學生に大學の學科を授ける所に初めて無理と云ふことが成立するのである。今や學道も亦斯の如しで、道念の淺深は千百人各別であるが、其の道念の高さ丈けそれ丈けの程度の修行するのは決して無理でないのである。佛祖の言教に策勵とか激勵とか云ふ意味の慈誡は到る處にあれども、決して無理をせしむるのではない。其の道念を增す、深大高遠にせしめんとするのである。決して無意義の抑壓や激勵をするのではない。無眼の師子は抑壓や激勵を以て、策勵の如く解するものなしとせざれども、これは佛法を知らざるも甚しと云ふべきである。生命なき形式佛法に墮落するのは、此の誤解から來るのである。

既に佛法は無理なき法なりと雖も、道念を策進激發せしむる法であるといふことを深く信徹せねばならん。而して佛法は其の志程度の修行をさせよと云ふのである。佛の藏通別圓を說き、小始終頓圓を示すも佛意は只だ此の無理なき正道を踏み行ひつゝ、――竟に佛智見に入らしめ玉ふの、――深旨に外ならんのである。唯志の許す程度の修行をせよの一言にて、道兄の質問に答へ得て餘蘊なしと思ふのであるが、明了ですか。更に叮嚀に云はゞ道念を培養しつゝ、其の道念の程度に欲する程度の修行を親切になさるべしと云ふに外ならんのである。

三　坐禪と健康

茲に於てか如何に身體虚弱にても、頗る猛烈なる命懸けの修行を致して一年半歳に若死するも無理でない人には決して無理でない。彼の雪山童子は飛むで鬼神の口に入つたけれども、童子に取つては平々坦々の修行であつたのである。たとへ肉體頑强にても、厚き蒲團の上に安坐して、一日二三時間宛の坐禪でも志し、其の位の修行にすら堪へられぬ修行者には中々無理なる注文と云ふべしだ、若し夫れ道の尊重なる方面から申せば、修行の爲めに身體を傷い死したとて、――何の惜むべきやである。身命は得易し道は成し難しだ、道の爲に身を捨てる程の志あれば、必ず生々人中に生を受け來つて、人天の福樂を愈々増進しつゝ、正法に逢ひ正法を修することを得るのであるから、道の爲めならば命懸けでやるべしである。だが志がこゝまで來ない人に無理にやれと教えるのではない、御隨意である。止むに止まれん志のまに〳〵修行をなさるべきである。

然れども身體虚弱なれども、身體を傷はずに修行のできぬと云ふことは決してない。坐禪致した爲めに、――健康を害するの、疾病を起すのと云ふことはない筈であるのみならず、坐禪の修行は却て身體健全になり疾病も治るものである。然るに健康を害するが如き疾病を起すが如きは、修行上の心得に必ず何等かの缺點があるからである。小生の如き幾百人の修行者と、同床同修致せしことあれども無理な（特に身體に）ことをせざる以上、一人として右の影響を受けた人あるを見ざるのみならず、右の事態にある人も追々全快をするものゝみを見るのである。

小生の如きも以前非常に病身であつたけどれも、多少の修禪力に依つて年を追ふて健全の度を増しつゝあるのである。且つ虚弱な人でも、志操純一なれば必ず修行成就致すこと必定底の道理で。――一點疑着を加ふる餘地は決してない。現に大正六年一月九日七十八歳を以て御遷化遊ばされたる、前妙心及南禪管長高源室毒湛老大師は、少壯の時極めて蒲柳の質十二三歳非常の肺患にて、其の當時より肺三枚はなき人であつたが、純一無雜の志操と無理をせず着々修行遊ばされたので、四十歳頃には堂々た

る一方の大宗匠となり、彼の有名なる柏樹軒老師を補けて四衆を接せられて、道譽夙に天下に高かりしに非ずや。其の後七十三歳頃迄は病魔に襲はるゝ事なく、且つ肉付きも宜しく血色も極めてよいので、大醫諸士も老師は實に醫學上のレコード破りであるなど、驚嘆せられし人であられたことは世間多く知る所である。

依つて病身であるから修行が出來ぬなどゝ云ふて高源室を欺くことの出來ぬことゝなつて居つたのである。岡田式靜坐法等の行はるゝ所以も、兼ねて御一考なされば思ひ半ばに過ぐることゝ思ふ。

四　我見を去れ

要するに佛正法は決して無理なき大道であると共に、道機を培養せしめつゝ、志の許す程度の修行をせよと云ふのである。而して虛弱の人も、壯健の人も皆以て入道することを得るものにして、修行は身心の爲にこそなれ、害になる筈のものではない。若し害になつたとすれば、心得方に不徹底の所ありしに依るや、――必せりである

茲に於てか益々正師の正指示を受けて、――舊知舊見を手打ち拂ふて、眞正直に敎の如く修行するまでのことである。而して正師の鑑識法の二三を申し上ぐべきなれど、今は餘白なしと致して置きたし。

御尋ねの心では或はないかも知れぬが、小衲の解答の骨子は實に參見正師の四字に歸着して居るのである。其れと共に正師の前に赤兒となりて、信受奉行するのです。決して我意我見を用ゐる勿れ、若し我意我見又び批判眼の動く樣では大法決して手に入らず、入るとするも非常の曲折を要することゝなるのであるから、右の精神能く熟察いたされたし。斯る要略のみにては或は明了せざるべしと雖も。たとへ百千萬言を費すも要は唯是の如きのみ、猶ほ不明なれば重ねて御尋ね下されたし。

四、洞上安心の眼目(佛戒論)

圖　曹洞宗の宗意安心に對し異議紛々なるやに見受け候。吾々乍入底の者實に取捨に迷ひ候間何卒赫日

徹底的御高說承り度候。（仙臺。中村一乘）

答　何宗に於ても安心問題と云へば事極めて重要であるが、殊に我が正傳の佛法に於ては更らに重要なること論を俟たないのである。從つて輕々に之を話すことは頗る困難であつて限りある時間、限りある紙面を以ては到底組織立つた話は出來兼ねるから大體の要領を掴むで、なるべく徹底する樣に話を致す心得である。

一　經律論の三藏

第一佛敎とは如何なるものであるか、佛敎は廣大にして且つ復雜であるが、先づ是を具象的に云へば經律論の三である。然而經とは、理窟に亘らずに佛が自證の境界を機に隨つてお話しになつたものを云ふのである。律とは僧俗の何れを問はず、苟も佛弟子規たるもの日常生活上の規律を示されたものを云ふのである。論とは佛自證の眞理を理論的に示されたものを云ふのである。佛敎は實に廣く且つ深いのであるが、只一言にして是を言へば經律論の三である。是を三藏と云ふのである。

此の三藏の各特種の點があるのであるが、要するに佛自證の眞理即ち眞如法性を種々の器機に示したものに外ならないのである。然して此の絕對の眞理を證得して、而も實行の上に是を現はすと云ふより外に、佛敎と云ふべきものは何物もないのである。八萬四千の法門、六千餘卷の經典も畢竟する所は此の三藏である。その三藏と云ふも、一佛心印の各方面に外ならないのである。

二　戒定慧の三學

斯く多義多端窮りなき佛敎も、人々具足の一佛心印を體得する修行の方面に約むる時は、戒定惠の三學に總括されるのである。戒定慧の三學は佛敎の實行方面である。

戒とは前述の三藏中、律に相當するもの、即ち比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷等の操行を律すべき規則を示されたものである。

定とは佛敎々理上の道理を我が物にするには、必ず禪定の修行に待たねばならぬので念佛、題目、觀法等種々の手段ありと雖、歸する所禪定の修行である。各宗各派

ありと雖も、其の內容より見れば、悉く禪定を實行するに外ならぬのである。

慧とは此の禪定に依りて、漸次に亦頓即に本具の靈性が發揮せられる、是れ即ち慧である。然して此の慧の落着く所を、眞の佛智見とは云ふのである。

戒によりて定力現はれ、戒と定とに依りて慧を現はし、竟に佛智見を開發するに到るのであるから、一大佛敎の實踐的方面は、此の戒定慧の三學にあることを知らねばならないのである。

三　縱に見たる三學

次に此の戒定慧を縱に見ることである。縱に是を實行することは修行の順序として先づ戒法操持が堅固でなければならない。戒を土臺として定を修し、定を修した結果として、そこに慧が現成する。其の證梵網經にありて正しく此の戒定慧を縱として見たる次第順序が明瞭に示されてある。曰く、

持戒爲二平地一禪定爲二屋宅一生二智慧光一次第得二明照一定慧力莊嚴萬行得二具足一乃至成二佛道一悉猶戒爲レ本。

先づこれが縱に見た戒定慧の三學である。戒法は基礎である。土臺である。土臺が堅固に出來て始めて禪定の屋宅を建立することが出來る。砂上の樓閣では何らの用を爲さない。

先づ戒の根本を實行した上で禪定を修せねばならないのである。其の禪定の家が立派に出來てこそ、始めて智慧の莊嚴を現すことが出來る。戒を捨て、定ならず、定を捨て、慧が成立するのではない。修行の最初より次第を追ひ、順を踏むで、佛道を成ずるに至るまでも、戒德を操持することが肝要である。

是れ解脫の本源にして、佛道修行の基本條件である。戒法の持てぬ人には定力の增進の道はない。例へば犯罪を爲した人間は何處となく落着かない、俯仰天地に恥ぢざる處に於て、始めて第一歩の落着が出來るのである。戒法を持つことが出來なければ人間として福分も得られないし、亦佛祖の修行が出來る譯のものでない。故に縱に眺

めて、戒を以て修行の根本となす所以の大略を明した次第である。

四　横に見たる三學

次に戒定慧を横に見やうとするのである。是を横に眺むれば一即三、三即一である。縱に見た場合は一二三の順序があるのであるが、横に見るときは戒定慧の三者圓融して、全く同一である。故に縱に見たよりも、横に見た時の方が遙かに其の意義に深遠廣大なるものがある。何となれば三學中に於て、戒と云ひ定と云ひ慧と云ふも、畢竟一佛性の三方面の德用に外ならないからである。

更に一歩進めて道はゞ一佛心印を三度擧揚するに外ならむからである。大都一實の佛敎では何を說いても皆悉く一法の二義である。二とは千萬無量を意味して居る。一性の萬德であるから、萬德即ち一性である。その一法の一義と云ふ立場から戒定慧を參究すれば、一性即ち戒定慧であるから、戒定慧即ち一佛性である。已に一方の三方面であれば、一即三三即一であるから、戒も定も慧も一々が佛性の全體であり全用であると云ふことを諦信することを得るのである。業に既に一即三、三即一、と言へるものならば戒法の中にも定も慧も完具して居るのである。定の中にも戒も慧も全有して居るのである。又慧の中にも戒も定も全圓して有るのである。

この一々が佛性の全體であると云ふのは即ち戒定慧を横に見た所の論である。如是內容より見れば一即三であるが、是を修行の事實の方面から見れば、戒定慧と各々の順序があることを知らねばならぬ。而して、此の縱横事理即一の眞趣を知らねば、我が佛戒を論ずるに足らむのである。

五　戒體の發得

放行すれば三學(六度八萬の法門)把住すれば即一の法門なることは既に明了となりたれども、既に分つて三學と云ふ已上は無意味に漫然として分類したのではない。必ず分類すべき理由あつて分類したのである。其の理由とは三學各々特德あつて存するのである。便ち戒定慧各々の働きが異なるのである。即ち戒には戒の分野があり、定

には定の持場があり、慧には慧の特色がある。

其の三學各々特色あることは旦く措き、戒と定慧の特色を明歴に分類せば、戒は是れ淨信一現の即處授受して感具するのであるが、定慧は實行の上に備はるのである。縱令ば受戒は家督相續の如く、定慧は其の家業研究の如きもので、相續して主人となるは一朝夕の式にあるが、研究して力を自得することは多年修養を要すると一般である。是を我が宗の高い戒法の上から見るも、戒は即ち佛性にして人々本具である。修行しなければ得られないと云ふ譯のものでない。只それ信の一字に依て戒體は發得せられ得るのである。一白三羯摩の上なることは勿論なれども、畢竟智愚賢不肖を問はず淫男淫女奴婢畜生に至る迄も、戒師の說戒を解して信ずるものならば、何人を問はず戒體を發得することが出來るのである。

已に戒體を發得することを得ば同人覺位である。是れ則ち佛戒の佛戒たる所以であつて、只單に規則を嚴守する意味ばかりの戒でないことを知らねばならん。則ち佛戒の根本は佛性であると共に一面からは佛家の規則であり家憲である。此の規則を保てば、佛家の那人となることが出來るのである。例へば貧人が富豪の家に養子に行くが如く、富豪には一定の家憲がある。その家憲を守ることが出來るや否や、出來るとならば養子に貰ひ受けやうと云ふので茲に約束が成立して、貧人が富豪へ養子入りをしたとする。富豪の主人としての內容や技倆のことは養子に行つて後、實行の上で我が物とすることが出來るのである。我々衆生が佛家の門に飛び込んで、佛の家憲を得るのも又々これと同樣である。

故に淨信一現する所に佛戒は受けらるゝのであるし、佛位にも上り得るのである。

六　正傳の佛法

定慧は多年の實行によりてのみ得られる。佛智見とは斯う云ふもの、と敎へたとて到底得られる譯の者ではない。只々實行によるのみである。如是戒定慧各々その特

色を持つて居るのであるから、此の邊の所はよく吟味して心得て貰はねばならぬことである。そこで此の戒の方であるが、最初に佛家の門に入り了るには戒法の力でなくてはならぬ。然して戒は佛家の門に入り佛位を相續するのみならず、一即一切法であるから堂奥に到る迄も戒は戒である。

僧俗を問はず受戒の時が既に入佛門にして、佛地を跩跳するに至るもやはり戒である。見よ剃髪染衣の時も受戒であると共に、大悟徹底して嗣法相續の時も、嗣書血脈大事の三物あるを見ても知ることが出來やうと思ふ。殊に注意の爲めに一言すれば臨濟宗では公案に且く深淺の別を立てゝ、段々と深い所に修行を進めて行くのであるが、五位を調べる時は、修行が略終りに近いた時である。是を五位の調べと稱するのである、其の五位の調べの濟んだ上に十重禁戒の調べが出てくる。濟家に於ける最後の參究は、此の十重禁戒である。此の因緣を見るも戒は規律の個條書でないことを信ずることが出來やうと思ふ。それから此の戒の分野と云ふことがよく判らねばならぬ。分野とは所謂三學中に於ける戒の受持場のことである。

佛戒のことは前にも述べた如く始中終一貫して居る、即ち佛家初入の門より堂奥までやはり戒である。而して定と云ふも、慧と云ふも、戒と云ふも、其の內容は等同一如の佛性なれば、初後共に何れでもよさそうに思はれるのであるが、初入の門は必ず戒でなくてはならぬのである。既に佛家に投じて一蒲團上の行履上には戒が定であり、定が慧であると云ふことを得るのである。戒定慧等明見の佛性とも云ふことを得るのである。明見佛性の一性三昧即戒定慧一等三昧と云はるゝのである。

茲に至りて戒法の受持場、即ち戒は佛法の門番にして、且つ主人公であることを知るのである。定慧は然らず、門前にても、修すれば修し得られぬでもないが、正しくは佛家に入り了りに後に修すべき佛の家業である。

七　戒の體相用

只一言戒と云へども戒にも無量無邊ある。それも一應は知らねばならぬ。戒法の上

には抽象的には小乘戒、菩薩戒、圓頓戒、三摩耶戒及び我が門には佛戒等と云ふと雖も具象的には人天の五戒十善、六齊戒、八齊戒、三歸戒。三聚淨戒、十重禁戒、四十八輕戒、比丘の二百五十戒、比丘尼の五百戒等、亦は三千の威儀八萬の細行など。

苟も規律的の法門は皆是れ一口に戒法と云ふのであるが、其の授受に至つては宗旨々々に依つて各々同一でない而して我が門正傳の戒は大乘戒にも小乘戒にもあらず、圓頓戒にも三摩耶戒にもあらず、一即一切戒、一切戒即一戒の佛戒である。

其の佛戒を分つて云はゞ即ち十六條戒なのである。而して此の十六條戒が何に依りてか佛戒なるやは入室單傳の人のみ知るのである。凡そ戒法は其の身心を律する法規である。同じく戒と云ふも其の内容は深淺高下の差ありて消極的に積極的にあゝしてはならぬ、こうせねばならぬと云ふ事を示す點に於ては同一である。其の點より云へば世の法律と大差はない。

而して我が宗の戒は十六條である。何れの時代から我が宗に斯く定められしかは明らかでないが、只佛祖正傳と云ふより外ないのである。吾人は今更是を云々する言葉を持たぬし是非を論ずる必要もないのである。我が宗の戒法が此の十六條戒に定められたのは、正眼圓明の佛祖の宏範に依れることにて、繁簡中道の大法なりと尊信すべきである。凡そ人間を導くには程度がある。過ぎても惡い、足らなくてもいかぬ、然り而して予は參究の都合上十六條戒を左の如く、一往分類して話すのである。則ち

三歸戒は戒の體、三聚淨戒は戒の相、十重禁戒は戒の用。

である。（無論體相用と云ふも三即一の一戒なることを忘れてはならぬ）さて三歸戒を體とすることは誰人も異論なき事と信ずるのである。佛弟子となるには必ず三歸戒に依るのであつて、三歸戒に依つて始めて性具の戒體を發得することが出來る。イヤ實は性具と云ふも拖泥滯水であるけれども、已に修證義にも「三歸に依りて得戒あるなり」とある。

然れ共三歸は決して得戒の本基とばかり見てはいけない、本體を離れて相用なけれ

は、三歸は是れ佛果菩提に至るまで、依止すべきもので實は三歸の外に一切の法は無いのである、さて三歸を受けざるものは、後の戒法を受くるの資格はないのである。三歸によりて佛家に入り、佛家の人になつて始めて種々の家憲を知るの必要があるのである。玆に於て三歸は佛家の人となる第一の戒であるから、戒の本體であることが明かである。

其の三歸戒が發して相となれば何うかと云ふに、消極的に惡事を爲すな、積極的に善事をせねばならぬ、且つ衆生を利益せねばならぬぞと示すのが此の三聚淨戒である。然れども尙ほ是れ抽象的の三規にして具體的でないから要領を得難い。之れ即ち戒の相であるからだ。

更に戒光を實地に活躍して行くには十通りの戒條がある。之れ戒を最も具體的に示されたものであつて十重禁戒即ち是れである。故に此の戒を戒の用と云ふ所以である。無論戒の用と云ふも用孤り存するに非ず、用所に相と體とに徹底する用である。

八　十六條戒の圓融

大都、戒法は十六條ありと雖も、一戒即十六なる圓融の道理を知らねばならぬ。此の一戒即十六條を具足して餘すことなき道理を知らんが爲めに、今玆に一の不殺生戒を掲げて一往說明することゝせん。彼の達磨大師の一心戒文の語を借りて云はゞ「自性靈明於二常住法中一不レ起二斷滅見一名爲二不殺生戒一」常住の法に於て斷滅の見を起す故に殺生の心が起る。斷滅の見を起さない所に根本の戒が保てるのみならず、一切の戒が保てるのである。

敎授戒文にも「生命不レ殺佛種增長可レ續二佛惠命一莫レ殺二生命一」とある。第一淺近な道理より云はゞ生命不殺と云へば生物を殺すな、生物を殺さねば佛種が段々增長する。自己の佛性を大事と思はゞ生物の命を取つてはならぬと云ふ程の意味である。さて此の戒の上下概括した意味は是れに外ならぬのであるが、物命を取るなと云ふは、一往は有情の命であり、再往は一切生物の命であり、三往は一切の無機物に至る迄破壞を

謹めと云ふのであるが、此の三は皆物質的の生命である。

そこで更に一歩進めて、精神的生命に及び、他の善心を殺すな、自己の善心を殺すな、更に自他の平和を破るな、自他の善心を殺すのが此の戒を破つたことになる。更に進むで、自他の已起未起の善心を増進せねばならぬ。其の善心と云ふも世間の善心もある、出世間の善心もある。最後には金剛不壞の常住佛心を殺さぬ樣にし、其の佛心を活現せしむるのが此の戒の落着きである。

其の常住佛心にどう落ち付くかは今の所論でないが、此の儘心に落ち付いた所は三德法身現前し四智圓明の所であるから、諸善萬行具足せずと云ふことはない。故に此の常住佛心に安定した所が直に佛境界であり、十六條戒卽得現前の時節である。此の時何れの戒が持たれざる、何れの定か具はらざる、何れの慧か現前せざる、一戒卽一切戒なると共に一戒卽定慧等覺なるの道理は此處にあるのである。其の殺不殺の論量を超越して此の常住佛性に安坐するを自受用三昧と云ひ、又坐禪と云ひ又佛戒と云ふのである。故に一戒を持つ處に他の九戒具足し、十五戒具足すること分明なりと云ふ可きである。

凡そ一切の忘想分別は、皆不可殺の佛性を殺した所に起るものである。端坐三昧の處には妄想分別の起りやうがない。故に坐禪三昧の處は殺生戒を持つ處であるのみならず、一切の戒も定も慧も現前の好時節である。否茲に至つては三學の閑名目もない。佛性の符合も實に心田の汚れである。此の時節が現前する時始めて眞個佛戒受用底の人と云ふのである。此の道理を了解し易からむが爲めに便宜上體相用の三に分類し、三即一體の法門を示したのである。

扨て我が宗は坐禪を以て佛性を徹見すると云ふことは、傳燈の列祖は申すに及ばず、我が乃祖の著書を見れば分る。殊に「坐禪儀」や、「辨道話」に於て明らかである。坐禪を以て自行化他することは、我が宗の我が宗たる所以である。坐禪は我宗安心の大道なることは何人も異論のあるはづはない。然るに我が宗の安心を戒法に依つて定める

と云ふ様な考を起す人が此頃あるのであるが、佛法未だ知らず法財用捨の道を明めざる處より起る迷見である。其の用捨の法とは、或が門に入るには必じ戒でなくてはならぬ。而して門に入つて後は三學等一の禪あるのみである。

茲に到つては三學に更に輕重なく、更に分野もない、否三學の閑名目すら用不着であることを信徹せねばならぬ。或る論者は禪と戒に輕重を見、主伴を見るものあれども、實に眼華するも甚だしと云はねばならぬ、輕重主伴なしと雖佛道初入の門には唯戒法の一あるのみである、されば入道の要、安心の門は、偏に修證義に依つて決着せねばならぬと云ふことを知らんければならぬ。

九　修證義の由來

其の安心立命の形式が修證義と云ふ形を以つて現はれたのは最近の事である。これが沿革を話せばよいのであるが、既にその暇がないから大略に止めて置くが、我が宗は佛教の總府であるから、昔から一宗としての特色ある布教法が一定して居なかつたのである。但し入道の要門は修證義の通りに定つて居たのであるが自他共に其の道を用ゐながらも意識して居らなんだのである。換言すれば只無意識的に實行して居たのである。そは僧となるにもせよ又在家の信者となるにもせよ必ず授戒をした。然れども必ずしも其れに捉はれずして、我が宗は佛法の總府であるから一代佛教の全體をソックリ自家の寶財として持つて居るのであつて其の御客様次第で。如何なる佛法の御馳走でも出せるのであるから、一定した布教法などの存しなかつたのが當然である。

併しなが今日に到つては、色々の宗旨宗派が澤山出來たから、勝手なことをさせて置いた日には、或は一宗としての教團の安危に關するやうな事が勃發すまいにも限らぬ。一宗として佛法の總府たる本旨に反せぬ範圍内に於て、宗意安心所謂入道の要門を定める必要に迫られたのである、それより我が宗としての沿革論、安心問題が始まつた。種々雜多な說の中時として、下根の人は念佛に依て極樂往生を願ふべしと云ひ或人は隨喜稱名成佛決疑三昧義或は落草談等の書を著して、釋迦彌陀二元論的の說を

なし、念佛法を以て成佛を說くなど、議論一定せず建設破壞前後二十年間に亘り、宗局より發表したものすら打ち壞されたやうな狀態であつた。玆に於て憂宗愛民の某々氏等が扶宗會を開き正法眼藏の精神に依つて、修證義が出來たのである。（無論今日の修證義とは異つては居る。）

我が宗の信仰問題もこれによつて先づ一段落を告げ、信仰問題界の英雄の割據も是によりて漸く閉息するに至つたのである。扨て扶宗會は中々の大隆盛を極め、我が門信仰界の統御者であるかの如き觀があつたのであるが、宗門當局者と、扶宗會の人々と協議の上、扶宗會を解散し、且つ時の兩禪師が兩祖の意旨を察し、其の修證義を換骨脫體して現に行はれつゝある、所謂、曹洞敎會修證義を現前することゝなつたのである。

斯の如き沿革を經來りて、正傳の佛戒に依つて身心決着の大道を確立するに至つたのは歷代の祖師並に開山のお言葉にも、又實際の上にも歸戒を授けて優婆塞優婆夷となし又戒法を授けて出家の佛弟子ともなることを許されたのである。要するに佛弟子となるには必ず授戒入位によると云ふことは、千佛萬祖の洪範である。況や我が正傳の佛戒を受くる所に直に大覺の佛祖位に證入するの一大事因緣なるに於てをやである。と云ふ理由の下に修證義が完成せられたのである。

十　安心決着の處

扨その修證義の總序は佛法の信仰を起すべき根本を示して居る。そは横に性具佛性、縱に因果應報を示してある。此の道理が一分でも分れば佛法に入らざるを得ないのである。次に懺悔、受戒、發願、行持の四つに分類されてある。

けれども信仰が四ヶ條あるのではない。たとへ四ヶ條あるも、其の內容は唯一絕對の受戒である。則ち一戒光明に歸一するのである。一戒光明と雖も受戒するには懺悔せねばならん、懺悔受戒し了りぬれば其の戒光天地を照耀する、是れを發願行持と云ふのである。故に其の上求下化を分つて四原則とすれども、其の要は一戒光明の行履

に外ならむのである、たとへば懺悔は雲を拂ふことであり、受戒は月の現れであり、發願は下大地を照し、行持は上天を照すのである。我が門入道の安心は此處に於て決着すべきである。

そこで修證義の安心決着とは、畢竟佛門に入ることである。佛門に入るとは同入佛位であり佛家相續である。定慧の修行は續いて起るべき問題で、安心の決着及び信仰の統一は、先づ佛家の門口に於て定むべきである。他國の塵境に去來するか、本家鄉に歸るか、是れによりて信仰統一の問題が決定せられ統一せらるゝのである。茲に於てか洞宗の安心なるものが發得せられるのである。

而して定慧得力の問題は佛家の門前門内共に得られぬでもないが、先づ受戒得位に入門して後、修すべき家業であるのである。此の修行戒とも定とも慧とも云へぬことはないが正傳の佛法は是れを只管打坐と云ふのである。然れば信(同入佛位の信)は初入の門であると共に、佛祖堂奥の一大事因緣なれども、入門には必ず信に依らねばならむのであるし、門内では坐禪修行と云ふのであるから、自然と不知不識の間に信は初入の淺法とし、禪は堂奥の深道なりと誤つたものである。イヤ誤りばかりではない、三學各々分野分野を定める一往の差配よりは深淺の二義はなけれども、一往斯く順序を定めて好いのである。

是れを功勳五位に配當して見れば、信は是れ向位得入の法門にして、禪(定惠)は是れ奉位であり、功位であり、共功位であり、功功位獲得の法門である。故に受戒入位(向位)の當處より直に奉位に入る大人もあり、或は一年兩歳の後、五年十年の後、或は一生兩生の後、必ず奉位に登り功々位の頂きを極め、正偏圓轉の佛祖の慧命を嗣續するやうに必ずなり得るのである。而るに受戒の後は只相似の禪、似非の戒を實行すれば好いのであるかの如く思ふものなしとせぬのであるが、實に正法を謗するも甚しと云はねばならぬ。正師の室に入らざるの錯りである。謹んで破大乘病に墮つてはならぬ。

十一　結　論

宗門の安心夫れ已に斯の如くである。強ち戒を先として禪を除いた譯ではない、唯に我門最初第一歩の安心、即ち佛門に入るには戒を以てする旨を明にしたのである。だから取るに足らぬ淺薄なものとのみ思ふべきではない。彼の正定聚不退位を以て、安心の最上とする彌陀の信仰と云ふは、此の邊にも未だ來て居らぬ信仰ではないか。何となれば三昧未發得と云ふ所より見れば(換言すれば成佛作祖の大智未發のこと)我が受戒入位も、正定聚不退位も變りはないが彼の未來成佛の疑ひ晴れて只退信せぬと言ふまでのこと、我は直下向入覺位の眞實諦に入るのであるから、其の深淺高下云はずして明々である。況んや彼の宗よりも迂遠なる諸宗に於てをやである。此の佛心を單傳した我が門の最尊貴なる所以を諦信決定すべきものである。

見よ宗門の安心は迷悟凡聖、知不知は別問題として、佛性常住の一心の大戒の理を聞き是れを諦信し、一白三羯摩の當處直に佛位に入ることが出來るのであることは、應身の釋迦牟尼如來も、報身の盧舍那佛も明に證明ましましてある。此處が同入覺位の境界で、我が門の安心である。戒を受けて然る後禪定の智慧の修行をすることが肝要である。

併し禪定智慧の修行は必ずしも打坐ばかりではない、商人軍人農人等の職務の三昧に入る所、直に是れ一信戒の光明である。眞に懺悔が出來、信法を以て全精神として生活が出來るならば、皆是れ一戒光明である。一切の妄想を捨てゝ、自己の行ずべきを行ず、是れ一戒光明である。だが中々一回放身捨命の修行の上ならねばさうは行くものではない。出來なければ更に進むで工夫坐禪をすべきである。

受戒後の日々の生活は悉く是佛作佛行であるが、それで安心の出來ない人は坐禪を修すべきである。否それ丈では斷じて徹底安心の出來るものではない。其の盲目落付が何になるものか、我が門の信仰統一は實に是れである。我が門の特色我が門の大生命は即ち此處にあることを辨得して貰ひたいのである。

五、曹洞宗道俗安心の標準

問　私は洞宗青年僧侶に候が、常に兩祖の御著述を拜覽し道心を勵まし、安心の標準と致居候。然るに近頃知名の布教師より吾宗道俗の安心標準は修證義一卷にありて、他は必要ならずとの御注意を蒙り候が、此の點、甚だ疑問と存じ候、嚴正なる御教示を仰度候。（北海道。一寒僧）

答　此のお疑問は宗の名脈の依つて懸かる大問題であるに依つて、簡單なる御答では徹底せぬのであるけれども、紙面に限りあること故茲には其の要領のみを述ることにする。

一　一書即一切書

扨兩祖大師の御著述は悉く宗門の全精神を横拈倒用して、兒孫の爲めに示された金言金句であるから、お說の如く全く信受奉行せられてよいのです。否、斯く諦信決定せねばならぬのである。然し坐禪儀にまれ傳光錄にまれ乃至正法眼藏にまれ、どの著書にも皆兩祖の全身舍利があるのであつて、一著書には兩祖の面目が一部分しかないと云ふことは斷じて云はれんのです。故に眼藏の一卷にも廣錄の示衆の一段にも、坐禪儀の非思量の三字にも乃祖の全面目、否列祖の眞面目があるのです。然れども種々の御著述は應病與藥の爲めに種々無量に横拈倒用せられたのに外ならんのです。然れば一書即ち一切書、一句即一切句にして、一句も一切句も其の內容の同一佛面祖面の全體なることを知らねばならん。正傳の佛法の法印たる所は此にあるのです。然れば坐禪儀一卷あれば他は不用と云ふも可なるべく、兀坐の二字を徹骨徹髓すれば、他は不用と云ふも當らざるに非ざるや必然なり。然れども種々の聖誡に參じて兀坐に歸する道理もあること勿論ですから名著書を不用と云ふのではない、既に一書即一切書、一切書即一書の道理の上に立て、宗門の道俗安心の標準には修證義一卷て好いか否かを顧みるに及ばぬと云ふも何等不足でない筈ではありませんか。全く修證義一卷に宗旨は圓滿して居るのである。

二　修證義に就て

然り而して修證義の世に出でたる所以は、時代の必要上如何に佛法の總府たる我が門と雖ども、一宗として各宗の間に介立するからには總府たる立場を失はぬ限り、他宗派に對して我が宗の特色を鮮明にする必要に迫られて、現前したることを忘れてはならんのである。

而し此の修證義は懺悔受戒發願行持の四原則なりとは云へ、要は受戒の一法に外ならんのである。その戒とは人々本具の心地無相の戒である。心地無相の戒是れを性戒とも一心戒とも佛戒とも金剛寶戒とも佛智見とも一大事因緣とも本來の面目とも云ふのである。

三　佛戒の妙旨

戒と云ひ定と云ひ慧と云ひ、禪と云ひ佛性と云ふ。皆那一物上の換名に外ならむのである。然れば一切の祖書は悉く修證義の横拈倒用に過ずと云ふも更に不可ならんではあるけれども、安心入道の標準には僧俗を問はず必ず修證義に依らねばならぬと云ふ理由は、三學六度乃至兀坐と云ふと雖ども、入道には必ず受戒に依るべきことは佛祖傳來の宏範なるがためである。

見よ受戒に依つて佛弟子となることを得るのである、信男信女となるも受戒なり、剃髪染衣の身となるも受戒なるに非ずや。端坐三昧は一生の受用底の事にして、受戒は是れ入道の法門なればなり。但し禪も戒も其の内容は一如の大道なること勿論なりとす。略答まで此の如し。

六、隨宜の信仰問題

問　私は洞門の僧侶でありますが、幼少の頃より深く觀音菩薩を信仰致し、自ら信ずると同時に坐禪する暇なき本宗信徒の爲に、顆音稱名をすゝめて念聖解脫の妙境に遊ばせたいと思ひますが、洞門にては異安心となるでせうか御教示下さい。（東京。煩悶生）

答　我が門は佛法の總府です。佛法の全體であるから、把住するや、一法の取るべきもなけれども、放行する時は一々大光明を放つて佛法祖道にあらざるはなしとするのである。故に觀音薩埵に緣ありて、念聖解脫の妙境に入らむとする何の不可あらんや、異安心など、思ふ必要は更にない、古人は彌陀佛を念ぜず、南無乾屎橛と念じた祖師もある。然し其れは人に依り時に依ること漫りで是れを眞似なされては、破大乘になりますから、決してお勸めするのではない。

扨右は宗門の放行門中の事である。現代の我宗門上より把住し來れば、必ず戒より宗門に入り坐禪に安住して大解脫の妙境に遊ぶのである。而して若し口稱を要すれば、南無歸依佛南無依法南無歸依僧を稱念すべきことは、佛祖の宏範にして亦正法眼藏道心卷歸依三寶卷等に明に悃說せられたる所にして、修證義にも明了に道破してあるのです。方今三歸の稱念に換ふるに彌陀佛にせよとか、南無歸依佛丈けにせよとか、南無釋迦牟尼佛にせよとか云ふ、諸說あれども、皆悉く邪說にして取るに足らざる人師の妄想である。斷じてお迷ひなさらぬが宜しい。

無論盜人にも三分の理ありの道理もあること故、何とか理窟を付けて騷ぐ向もある樣子なれ共絕對に不可なのです。要するに其の人其の人の機緣ある所に隨はんとすれば何を稱名するも宗門としては更に不可はありませんが、宗門不動の通範としての稱念法を定めんと欲すれば、歸依三寶でなければならんのである。是れ佛祖の宏範にして亦た總府たる所以も此處にあるのです。

七、禪戒の關係と宗門安心の的處

問　前條安心標準の問答は、宗門の布敎信仰實際各方面に亘りて實に重要なる問題なりと信じ、左の疑を質す。

「然り而して安心入道の標準には僧俗を問はず修證義に依らねばならぬ。乃至端坐三昧は一生受用底の事」とありて、殊更入道の標準と云ふに圖點受付しあり。愚按ずるに此の文に依れば修證義は完璧と思は

れざるに似たり。乍然修證義發布の御告文には緇素安心正依の標準とありて、入道の二字なし。即ち修證義の一卷にて始中終の宗意を具へたる者と云ふ意なるべし。吾人は斯く信ず。夫れを單に入道の標準となし、其の堂奥に一生受用の端坐三昧ありとせば、禪戒一如の道理を殊更唱道するの要なからん、御高見如何。

（北海道。傘松生）

答 さて問者は禪戒一致の宗旨のみ執して、禪戒別旨のあることを見落したる病見より此の疑問起れることゝ思ふ。

一　禪戒一致の方面

禪戒一致の方面より見來れば、戒は是れ宗門の一大事因緣にして、また久遠那畔の最大事なり。禪と云ひ戒と云ふ唯符號の差のみ、其の內容は人々具足の正法眼藏涅槃妙心なるものなり。此の點より參見せば、修證義は輜素安心正依の標準にして、直に宗門始中終の一大事因緣なること一點の疑着を挾むべき餘地なきこと明了々々の事なるのみ。既に是れ一致のみの法門なれば、何すれぞ我が門に於て坐禪を以て始中終安心の正依とするのである。見よ我が正傳の佛法は、釋尊より達磨に至り、達磨より兩祖に至り、今日に至るまで坐禪を以て自他を敎誨し來れることは皆人の首肯する所である。永平開山の眼藏を見るも、大淸規を拜するも、坐禪儀を讀むも、太祖大師の傳光錄用心記を拜するも、專ら坐禪三昧を以て人天に示し玉ふに非ずや。戒と云ひ禪と云ふは符號の差のみと雖ども、千佛萬祖皆坐禪と云ひ、禪僧と云ひなし來れるものを、唯單に一致のものなれば何の必要ありてか修證義の編輯に當り、禪と云はずして戒と云ひ作し來れるものぞ。是れ則ち一致の上更に別旨ありて禪戒一混すべからざる大道あつて存すればなり。

二、禪戒の別旨に就て

此の別旨とは兎角宗門の人は戒定慧と云ふも要するに一佛性を三度稱するのみ、定慧等覺明見物性とは、明見佛性を定慧等覺と云ふことにして、定慧とは佛性のことなり云々と云ふ一致の方面を云ふことを知つて、戒定慧と名くる以上は、此の三學各々特色ありて存することを忘却するを見る。是れ一理淸平の病見にして、未だ釋法眼

の具はらざるの致すところなりとす。今や三學各々〳〵三特色あることを論ずるの餘白なきを以て、且く戒と定慧の特色に就て示さんか、戒は是れ信決定の所に得るものにして、定慧は實行修力の上に感得する法なり。

又戒は僧俗男女を論ぜず、苟も佛弟子となるには、必ず一白三羯摩の式を經て得戒し、同入覺位するのである。受戒せざれば佛弟子となれぬのである。定慧は佛弟子となるならぬに拘らず修行することを得るのである。假令へば他人にして他家の稼業を研究し得らるゝと一般なりとす。隨て佛弟子たりとも定慧を勤修するもあり。せざるもありと雖ども、矢張り佛弟子たることを得るのである。假へば其の家業を學ぶもあり怠慢にして學ばざるもありと雖ども、其の家の人に相違なきが如く、此等に付ては一々立證の文を引くを要せず、御明了のことゝ思ふ。是れ佛家の宏範にして兒孫の諦信し來れる家常の茶飯なりとす。見よ在家の佛弟子となるにも受戒なり、僧の剃髪式の内容も受戒なり、一寸定慧を修し否、大に定慧を修したからとて僧尼となり、優婆塞優婆夷となることを許すと云ふ佛祖の宏範何れの所にかある。故に換言すれば、受戒は吾人一超して佛家に入る戸籍轉換法である。否佛祖位を繼ぐ家督相續式である。當人佛位の尊大なることを知る知らぬは別問題である。定慧は只佛家佛位の尊崇であることを識得する修養である。此の修養は佛家に入るもの入らざるものも共に參究することを得るのであると云ふことを諦信せねばならぬ。

三　何の不可かあらん

さて修證義は（辨道話等に於て坐禪々々と云ふて丁寧なる坐禪萬能の我宗なるに）安心正依の法門を說くに、禪の一字をも說かずして、佛戒の一門を開いてせられしものは、只單に禪戒一致だらうと云ふが如き淺慮からではない。僧俗男女を問はず、智愚賢不肖を論ぜず。定慧の修行の有無に拘らず、拘も我が正傳の佛法に入り來つて佛弟子とならんと欲せば、必ず先づ佛戒を受けざる可らずと云ふのである。ゆゑに佛戒は何人を問はず、佛家に入る門鑑である。此の門鑑なきものは佛家に入ることは斷じ

て不可能なのである。尤も藥山の高沙彌等二三の例外はあれども、管には針を入れずとの公道よりは、絶對に許さぬのである。故に修證義は僧俗男女を論ぜず、安心入道の標準なりと云ふ何の不可あらんや。

四　佛法は等同一如なり

既に初めなりと雖ども佛法は等同一如なりと云ふことは敢て論ずるまでもない。大法の蘊奥と初入の法門と、一點でも淺深高下並に異色あるものは初めとするに足らんのである。初入門が一實の法門なれば、中終亦一實の法門である。故に一致の方面より見來れば、始中終如々不動の一戒光明であるや論なし。故に剃髪にも受戒あり、最後嗣法の時も受戒である。臨濟宗に於て修行の末後に十重禁戒の難工夫を示すに見ても、戒は初めであると云ふから淺近なものなど、思ふは、全く凡慮の沙汰と云はねばなるまい。されば若し戒を以て云へば、初め戒に入て戒に中し、戒に終ると云ふべきのみ。

然れ共我が正傳の佛法として穩健に云はゞ右の精神を忘れずして、戒に依て佛家に入り自受用三昧の坐禪に中し戒も禪も全く不知不識の親切に終らねばなるまい。此の總に忘却した處が眞の自受用三昧であり戒である。此の間の消息を能く體得して始めて我が修證義を語るに足るのである。此の擇法眼力明かにして我が兩祖の兒孫と稱するに足るのである。禪戒は只一致病に罹つては我が正法の把放を却することを免れまい。況んや或る人師の如く禪戒に輕重を付するに至つては實に沙汰の限りであると思ふ。されば安心入道の標的は必ず修證義に依らねばならんことは、他家他門は知らず我が正傳の佛家では、千佛萬祖の所傳にして我が乃祖の親訓である。若し修證義の三字に語弊があるならば、輜素入道の正門は戒であると云へば好いのである。

既に家裡の人となつて佛作佛行することを向上しては生死を明め卽身是佛の修行をするのである。下に向つては無緣の大悲を以て普濟含識するのである。此の上下一等に修行するのを報恩の行持と云ふのであり、且つ是を一戒光明とも云ひ、那伽大定と

も云ふのである。簡短の答意萬一を盡さず請ふ諒せられよ。

八、一佛稱名の可否と三寶稱名

問　（宗門安心の的處參照）「若し口唱を要すれば南無歸依佛南無歸依法南無歸依僧を稱念すべきは佛祖の宏範乃至南無釋迦牟尼佛にせよとか云ふ諸說あれども、皆邪說取るに足らざる人師の妄想ですから、斷じて御迷ひなさらぬが宜しい』とて、專ら三歸の口唱を勸說せられたるが、愚按するに三歸は十六條戒の初門なるに受戒者が永遠に三歸のみを口唱すとせば、三聚淨戒や十重禁戒を如何にすべき、高祖大師は『三歸に依りて得戒あるなり』と仰せられて、三歸は始めにして又終りに非る事は明か也答者は『修證義にも明了に道破してあるのです』と言はるゝも、修證義に於て『淨信を專にして口に唱へて曰く南無歸依佛云々』とあるは、信仰を獲得したる後も、受戒入位の後も永遠に口唱せよとの意にはあらざるべし。三歸を受けざれば後の三聚淨戒十重禁戒を受くる能はざるが故に、先づ三歸を唱へよと說示されたるものにして、淨心を專らにして口に唱へて曰く』の語は獨り三歸にのみ限られたるに非ず、後の三聚淨戒にも十重禁戒にも通ずべき心掛を示されたるものにして、其の此れなきは所謂影略互顯の文法ならんと存ず。尤も一宗一派に偏せず佛道と云ふ廣大なる見地に立ちて衆生を救濟するとなれば三歸口唱も一理なきに非ざるも、今日の如く宗を立て派を分ちたる成立宗教に於て、總括的の南無歸依佛云々にては少しく文字を解せる者は、何の佛に歸依せよと云ふやの疑問も起りぬべし、況んや三歸は吾宗の獨特に非すして、眞言等に於ても在家勤行の始めに口唱せしむるに於てをや、夫れよりは修證義さへ發布されたる時なれば、三歸等受戒入位の身の上は高祖大師が『草の庵にねてもさめても唱へ玉へ南無釋迦牟尼佛救ひ玉へ』と寤寐にも唱念し玉ひし南無釋迦牟佛尼を唱念しなば高祖大師の一生に同ずるのみならず、又『所謂諸佛とは釋迦牟尼佛なり釋迦牟尼佛是れ即心是佛なり過去現在未來の諸佛共に佛となる時は必ず釋迦牟尼佛となるなり』と、明示されたる安心正依の標準たる修證義の末文にも能く承當する事と信ぜらる。即ち三歸は入道の法門にして釋迦名號稱念は一生受用不盡の活三昧なり。此の點に於ても修證義一卷能く首尾を全うして餘蘊なしと思惟せらる。然れば則ち釋尊名號稱念說に對し『無論盜人にも三分の理ありの道理もあること故、何かの理窟を付けて騷ぐ向もある樣子なれども絕對に不可なのです云々』とて一概に排斥せらるべきものに非ずして、尙研究の餘地ありと思ふ御高見如何。

（北海道。傘松生）

答　お尋ねの御高論は小生も十四五年前より屢々耳に觸れつゝある御話である。殊に今より十年已前敎導講習院へ入つたことがあるが。御尋ねの問題は此の時代に最も問題として高潮を極めし時であつたと思ふ。講習院でも屢々論ぜられた事もあつた。だ

が小生は實に當今の人の輕跳なるに驚き且つ宗旨を曲解するに巧みなることに寒心しつゝあつたのである。隨つて茲に長大なる私見を書いて御答へしたいのですが、方今極めて多忙なのと茲には餘り長いことを云ふ譯にいかぬから、旁今回は唯大要丈御答へ申す事に止めて置く、けれども二三ヶ條に分けてお話するを便利なりと思ひ左に條を追ふて申しましよう。

一　釋尊を稱名佛となす證據なき事

古來佛丈法丈僧丈唱念をする宗旨ありて、阿彌陀佛を唱へ妙法蓮華經を唱へ又觀音地藏弘法等の僧を唱へるなど、一宗の規則としてもまた地方の習俗としても右の如く種々の稱名の御對象ありと雖ども、未だ以て釋尊を稱名佛とした例はない樣です。尤も近例釋尊唱名論出でゝより、ちよく〳〵と始まりしは別問題なれども、三國の佛敎史にはないのみならず、佛祖の經論や各宗の祖師方の著書に更にない樣です。聞く（大内居士）所に依ると日蓮上人は法華經を所依の經とするからは、釋尊を本尊とし唱名には、釋尊に定めたかりし故に釋迦如來を唱名佛として差支へ有りや無しやを研究せられしも結局釋尊は稱名佛とすることは出來ぬと云ふ理由を澤山發見せられて、止むなく唱名佛としての釋尊を捨てられたとの事が日蓮宗の秘藏書の中に縷々書いてあるさうだ。殊に我が宗祖は一佛唱名法を爲すことを誡めて居らるゝのである。證據は歸依三寶の卷に「イマ衆生イタヅラニ各々ノ一佛ノ名號を稱念センヨリハ　スミヤカニ三歸ヲウケタテマツルベシ。愚闇ニシテ大功德ヲムナシクスルコトナカレ」と示されてある。一佛唱名の小功德に擒はるゝの闇愚を學ばず、三寶歸依の大功德海に入れよとの慈諭ではありませんか。

殊に正傳の佛家には昔釋尊以來傳燈の列祖中、一人も一佛唱名を敎へた祖師は決してない。我が兩祖の傳中にも決して見出すことは出來ぬものである。然るに彼の傘松道詠中の「草の庵に」の歌も唱へ玉へではなくて、「申すこと」と書いてあるのである。また假令へ申すことが唱へであつたとしても、是れが開山の口唱念佛として坐下及後

昆の緇素に唱念々佛を勸あられたる證據なりとすることは、餘り牽强附會にして開山を强ゆるの甚だしきに非ずや。尙ほ一佛の名號を唱念せんよりは云々の慈誡と思ひ合せても分明することゝ思ふ。況や彼の傘松道詠集の如きは方今史料研究者の結論に依れば、その大部分の歌は後人の僞詠にして、到底開山の御詠でないのが多いと云ふことである。殊に草の庵に云々の詠歌の如きは、其の調最も俗惡にして、歌としても到底開山の高懷より出でたるものに非ざるべしとのことである。

但し支那の禪には盧山慧遠已來、念佛と混交し來れる形跡之れなしとせざるも、其の禪は北宗禪等の傍出禪にして、正傳の佛家の法燈を繼いだ祖師には一人もないとのことである。それにしても其の佛は彌陀如來にして釋尊ではない、然れば釋尊を唱念の佛とせんとすれば、兩重の過となると思ふ。一つに正傳の佛法には一佛を唱念する例なきこと、假令唱念するも釋尊を唱念の佛とする據處なきことゝである。此の二重罪過を犯してまでも釋尊を唱ふ佛となした處が、宗門の一部に一時的に行はれるかは知れざるも、斯る無理由の下に我が宗門の唱念法を定めるには餘り力なきことゝ思ふ。然るに問者は斯る無理なることを强ひて、我が宗をして修證義出現已前の隨意演法時代に引き戻さんとせらるゝが如何。

二　三寶唱名は我が宗の特色

修證義を一種新規の安心法と見られるお考は無論問者にも無之ことゝ思ふ。修證義は決して新規の法門ではない、佛祖正傳の佛戒である。宗門向上の一大事因緣である。既に新規の奇法でない已上は修證義の內容は、直に三國正傳の佛經祖訓中に明了々々として見出されねばならん。殊に兩祖の親敎中に躍如たる筈である。然れば近くは正法眼藏や傳光錄中にある明了々々の祖訓と符合せねばならんことは無論である。

さて此兩書に依れば三歸に依止せよと至る所に明示してあるのみならず、歸依三寶卷や道心卷を拜覽すれば、三聚淨戒十重禁戒を受ける前丈三歸を唱へよと云ふが如き明文なきのみならず、斷じて斯る意味は一點もないのである。三歸を唱念することは

一生涯のみならず、死の當に至らんとする時も、中有の時も托胎の時も、來生も生々世々も佛果菩提に至るまでも暇なく勵みて唱念せよと、苦口丁寧なる悃切周到なる慈誡あるに非ずや。此の確乎不拔なる親訓をさて措きてドー曲解しても、我が門の唱念法を一佛殊に釋尊の名號に換へる理由は毫頭見出すことは、不幸にして否幸にして出來ない。修證義の口唱三歸も右兩卷より出でたのであつて見れば、其の宗旨の趣く所は必ずしも得戒已前丈けと云ふ說は斷じて成立せまい。殊に三歸だけでは三聚淨戒十重禁戒が缺けるではないか、是れを如何にすべきなどゝの議論は實に幼稚である。既に三歸すら猶ほ法に不足ありとすれば釋尊一佛稱名では猶不足なるに非ずや。況や三歸唱名は三世十方一切の佛法僧寶の德海に直入するのである。三聚十重何ぞ剩す所あらんや。

殊に我が門は佛祖已來口唱には必ず三寶である、見よ三寶禮と云ひ十佛名と云ひ十方三世と云ひ其の他諸講式の文を見られよ、皆悉く唱念は三寶である。誰れか三寶稱名をば三聚十重得戒已前の法とのみ云ふものぞ。

三　三寶禮は入道の初門

眞言宗にも俗家勤行の云々を云はるゝは無論その通りなるべし。豈獨り眞言宗のみならむや各宗各派共皆必ず三歸を唱念すること必然なるべしと推考す。彼の無戒の宗を以て任ずる眞宗と雖も三寶禮丈けは必ず爲すと聞いて居る。さふなくてはならんのである。何となれば人根に利鈍ありて設化に大小頓漸ありと雖ども、三歸は是れ本家別家大乘小乘を問はず、入道の初門にして直に佛祖の堂奧なればなり。三寶を禮拜し、三寶を唱念し、三寶に歸依せざれば、初中後を問はず佛家の人に非ざればなり。斯る最尊貴の法なれども別家の宗派は別に一佛を唱名するもあり、一法を唱念するもあり、一僧を唱歎するもありて、彌陀を唱へ法華を唱へ觀音等を唱ふるを以て其の宗の宗風となすに非ずや。

四　佛祖の眞精神に參ぜよ

正傳の佛家は斯る一佛法僧を唱念せず、圓融無碍の三寶を一時に唱念して、一時に無等々の三寶海に流入するのである。其の功德の大小深淺は知者を待つて後に知るを要せんことゝ參學せり。是れをしも我が宗の特色に非ずして何ぞや、此の本家宗の特色は古來確立不動である。是れが今日佛法の總本家も一宗として立たぬばならん時代に逢着して、其の修證義となりて現成したのである。修證義は斷じて新規の法に非ず、佛祖正傳の純眞風なりとする一の理由である。故に修證義及び三寶唱名は、即ち入道の初門にして、直に一生受用不盡底の法門であると云ふ所以なり。

此の法門に信徹し直入するを即身是佛とし釋迦牟尼佛とし、自受用三昧に證入の佛祖と云ふのである。是れを禪と云ひ戒と云ふ、只是れ一法の兩稱なるのみなり。然りと雖ども無中更に一線道を通じて、入道已後餘り戒と云はずして坐禪々々と云ふべき理由ありて存するのであることは前來屢々呈露せし次第なり。乞ふ深く佛理の眞精神に參前して漫りに時流に漂蕩せられざらんことを。

九、曹洞宗に於ける異安心

問　眞宗や其他の宗旨に異安心と云ふ事をよく聞きますが、曹洞宗にも異安心がありませうか。あるとしたら果して如何なる事が異安心でありませう、御教示を願ひたい。（東京。津山秋順）

答　凡そ宗教と云ふものは、其宗々々に於ける一定不動の精神がある。若し此の精神が確定して居らねば一宗として世に立つ理由は斷じてない。其の卓立不動の精神に沒頭し、安住するのを其宗々々の安心立命と云ふ。

故に何れの宗教宗派でも一面に安心立命を示すと共に、他の一面には必然的、異安心なるものが附いて廻るのは、遺憾ながら免れぬ處である。況や我宗單傳直指の佛法に於てをやである。

一　禪風落地は法螺禪者の罪

第二第三の外教や、西洋從來の宗教のことはいざ知らず、正法單傳の佛法は、實に

難信難解難入であると云ふことは、千佛萬祖の等しく痛歎ます處である。誠に上根上智と雖も容易に信徹し得ること難いのである。況や中下の機に至つては、多聞多知なれ共狐疑不信多しと佛祖より屢々拜聞する處である。

既に這個一大事なる法門の千古萬古に輝ける端的を、先佛是を悟り、列祖是を單傳して今日に至れるもの、是れ我宗の大精神である。吾人因緣深厚のものは、初心に先づ此大道を信得及し、竟に大悟徹するのである。

正信の大機は初中後共に此の大道に安心立命するのである。狐疑不信の中下機の者は、多く信ずること不可能であらうが、只盲目的に隨順するものが多い。是れ亦仰信の徒とするに足れば異安心とは云はれぬのみならず、此信仰は誠に結構なものである。

然るに宗門の書物を生かじりして、勝手な事を亂道して居るものには、異安心者でない者は實に稀れである。實に惡みでも尙餘りある大法の大罪人である。我禪風を今日の如く落地せしめたのは、外敎者や俗人や破戒僧等の罪では決してない。皆似て非なる法螺禪者流の罪である。換言すれば宗內幾多の異安心者流の罪である。

二　信徹の佛性を體得せよ

然れば生死即涅槃は圓滿佛性三昧なることを信徹して、不落不昧の二理を歷然分明にして此に一佛性三昧を見出さねばならぬ。發心行菩提涅槃して其信徹の佛性を體得するにあるのだ。

されば異安心とは本具の佛性を信ぜず、淺近なる科學哲學に捕はれ、分別意識上に認め得る十人十種の人生觀を是とする之れその一なり。又本具佛性を半解して、猫も杓子も其儘で好しとする所謂無事禪者流之れ二である。因果不昧一點も昧ますこと能はざるを信ぜぬ之れ三である。一靈の眞性亙古亙今を信ぜず、或は斷見、或は常見に墮する之れ其の四である。

是を細別すれば十ケ條にも二十ケ條にもなるが先づ此邊で了解してもらひたい。要するに我宗程異安心者の多い宗旨は少なからうと思ふ。願はくは法の爲め自他共に御

注意あらん事を希望する。

一〇、所謂る洞宗法王教の批評

問　高田道見師の方今頻りに唱導せらるゝ法王教は、我が禪門の精神に契合するや否や、今や曹洞宗の一部問題になりつゝある樣に思ふ。小生も甚だ疑惑致して居ります。法の爲め敢て御明解を願ひます。

（大阪。疑惑僧）

答　佛法の總府なる我が宗門には斷じて契合致しません。但し一往佛教の精神には背きませんから一宗派としての御唱導なれば中々結構なる方法なりと存じます。

さて實は此の問題に付いては、既に三四回質問を受けて居るのでありますけれども、今日迄答辯を致しませんでした。何となれば、一つには高田師の高き御人格と深き學殖とを尊重するが爲め。二つには御熱心なる御唱導ですから輕々に評價することを欲せざるが爲め、三つには多忙にして法王教を研究する餘暇なきがためでした。而して

今お答へ申すとしても未だ研究致しませんのですから、徹底した親切なる批評、否お答へは出來ません。然れども先回、法王教の大綱要領とも云ふべき、「法王教極意問答」一冊と雜誌「法輪」一月號（洞宗法王教と題せり）とを强いられて一讀致したから、略法王教の大意を了解致した心得です。依て茲には餘り長い御答へが出來ぬのですから、其の程度の御答をして置く心得です。其の御考へにて御一讀下されたし。且つ右極意問答の方は大分に長いから、それは暫く措き、洞宗法王教の方に就てお話しすることに致します。しかし此の簡單なる答の意を知れば極意問答の方もまた幾多の法王教に付ての著書を見破る所の眼睛を得らるゝものを信じます。依て左に二三ヶ條に分類してお答することゝ致します。

一、法王教を讃嘆す

さて法王教を讃嘆するときは、本尊に釋尊。稱名に釋尊。本願に一大事因緣。淨土に常寂光土。依經に法王經（祖錄を用ひず二三の佛經より要所に選拔して編輯し平明

に訓讀す）を以て大綱を決定するにあり。凡そ本尊、稱名、本願、淨土、依經の五要素を一決せざるものは一宗派として立つの力なく、而して在來の各敎各宗中には此の要素略具るもあり未だ具はらざるもあり、たとへ具はれるものも現代的にあらざるものなりとするにあり、そは大に議論の餘地あるべしと雖も、要するに宗敎は此の五要素なかるべからずして、在來の宗敎には五要素完具せざるものなしとせず。たとへ完具するも方便假設多くして、人智の進歩せる現代及將來の宗敎とするに足らず。此に於てか法王敎出でゝ現代の眞要求に應ぜんとするにあり。

而して其の本尊を釋尊とするは實に佛敎々徒のみならず、實に我が地球上の人類は公平に觀察すれば何人も異論ある筈なし。地球上今の人類の歷史ありてより、釋尊の如き大聖人出でたる事なし。實に釋尊は此の世界獨歩の大聖人なりとす。此の釋尊に歸依し本尊とすることは至當至極と云ふべし。其の稱名を直に其の本尊に致したる所は、古來各宗のなし來れる所、決して斬新にはあらざるも異議のあらう筈なし。その本願を一大因緣と定められしも、佛敎各派ありと雖も、此の目的は皆一大事にあるのですけれども、言葉の上には方便ありて種々の別名ありと雖も、要は大乘佛敎の目的は皆一大事因緣を體得するにあり。然るに世間往々迷信に墮つて現世祈禱や遠き未來作佛や或は一種の慈善事業などが、宗敎信者や宗敎家の目的であるかの如く、世間出世間共誤解して居る今日であるから、一大因緣なりと確實に確證する亦已むなき佛事と思ふ。其の淨土を心外の佛土に求めず、卽處直心に淨土を建立せしめんとする所、實敎の眞實敎たる所にして、何の奇なく異なし、誠に王道蕩々乎たりと讃歎すべきのみ。其の依經は祖經に依らず、佛經中最適當の聖典より拔き來りて編輯せらるゝ所は、多少異議の餘地なしと雖も、要するに一宗として世に立つには所依の經典のあるべきは異論無之のみならず斯くなくてはならんのである。

要するに奪つて云へば知的にも欲的にも妄想の深き時代、與へて云へば、人智の進歩發達せる現代及將來の人心を感化せんと欲せば必ずしも舊慣を墨守せねばならんこ

とはない。否少々〳〵舊來のものよりも或は不完全の所ありても時に斬新なる新聲を發して教化するの必要あるのである。況や法王教の如きは實に現代及將來に最も適當した一宗派と存じ、歡喜讃歎措く能はざる方法であると思ふ。

然れども此に注意致し度きは二十幾年間に幾回か信仰の變遷を見たる高田師である、（御自身御自白の如く）今の法王教の如きは、大正元年頃よりそろ〳〵始めてお氣付になりし方法（余は不幸にして高田師の信仰の變遷には深き堅き信仰の發露とは見へない。唯時々〳〵十分御考へへの上御研究の結果ドーモ是れが好いと御定めになるのであると思ふから。信仰的學問上の意見としか思はれない、殊に六七年目に一變遷なさるのであるから信仰界の御旅行中であると思ふ。故に盡未來際變らぬとの鐵信肝より出でたるものに非ず、時に取つての好い方法であると云ふのである。換言すれば宗教組織的政策家の計議なりとしか思はれない）從つて、亦何時何教に御變遷なさるやら甚だ不安である。宗教信仰界の識浪情波のまに〳〵御動きになるやうでは、到底信仰の活火を以て人の妄頭腦を燒き盡すことは出來ません。願はくは此の方法の下に有緣の道俗を御攝取致されたいのです。此の方法の下に救はるゝものも中々澤山あるべしと信じます。宗教信仰界の事は政治社界とは異なり、一度稱道し始めたら一生涯位は動かない信仰を體してから稱道すべきであると思ふ。

二　我が正傳の佛法の大意

我が正傳の佛法の大意とは、政治機關にたとへて云はゞ中央政府であり、道路にたとへて云へば里道にあらず縣道にあらず國道である。東海道である。里道ならば通れるものと通れぬものとあり。地方廳なれば、或は商法を特に奬勵するもあり、農業を奬勵する地方もあれども、中央は一切の業務を總覽し一切を督勵するのである。東海道ならば通れぬ人は一人もない、汽車でも馬車でも人力車でも王侯も通る乞食も通るに一切を是非せず、分に應じて堂々手を振つて通れるのが東海道である。正傳の佛法は東海道であり、中央政府である。

何となれば釋尊の教法中にあつて修行するもの、其の幾種類の修行法があつたか分らんのである、是れを今日の宗派に飜譯して申せば、自力の行者もあり他力の行者もあり、自他力雜修の行者もあり、自他力一技の修行者もあり、其の一技も超越せる鐵漢もありしなり、是等の修行者を總じて佛弟子と云ひ、其の佛弟子を總禦し玉ふのが釋尊である。亦幾多の修行者の修する所、別なるに似たりと雖も、釋尊より見るときは、皆等同一如の一大事因緣を修行して居るのである。此の徹底せる大精神と幾種の佛弟子をそつくり御相續なされたのが迦葉である。換言すれば佛法の家の相續人は迦葉である、佛法の全體は皆悉く迦葉の一身に歸入したのである、其の迦葉の法を阿難に――達磨に――永平開山に――今日吾人法孫に傳承して來たのが我が宗である。

他宗は一經一論の宗であるから、何と理窟を付けて見た所が佛法の別家であり地方廳であり里道である、故に同く佛法の諸經論中に於ても可として取る經もあり、不可として取らぬ經も出來るは當然である。然れば正傳の佛法は佛法の一切を總覽して、一も捨てず一も取らずして、其の不取不捨の中に於て自在に緣に隨つて度與して、一々衝天の大機用あらしむる所の、佛心身を體得し、承繼し來れるのが我が宗の我が宗たる眞面目である。

三　我が正法と法王教と契合するや否や

決して契合せずである。佛法の別家里道地方廳としては中々結構の一宗派なり（高田師に各宗の祖師の其の宗を唱道せられし程の信念と熱心さへあれば）と雖も、佛法の總府とする理由は一點も見出すことは出來ません。其の理由は五要件を定めるから總府でないのです、五要件以外に佛法は全く殘る所なければ契合するのですが、五要件外に殘る佛法無量無邊です。例へば稱名を釋尊と定むれば、其の他の佛菩薩等の稱名は捨てらるゝに非ずや、等の上に於ても明了なるべし。若し不必要ならば釋尊何に依つてか彌陀等を示し玉はんや。亦更に曰く、佛法內に於て法に輕重すべきものなし、要は即處に緣ある法は皆重く不要の法は皆輕し。換言すれば輕重は法なり法は輕重に

非ずです。然るに法王教は釋尊を重しとし三世佛を輕しとするに非ずや。輕重の見へる唯物的眼識では實は法の話は未だ出來ませんのです。眞假と分けらるゝ樣だが佛法は一眞一切眞であり、一假一切假である。何ぞ實假を立てゝ輕重するの道やある。

開山曰く、「未だ學地の頂きに登らず何ぞ證階の邊に及ばんや」と、要するに別家宗としては結構なれど、總府としての一致點は斷じてありません。――本尊の證據に正法眼藏の面授卷を引き稱名の證據に供養諸佛卷を引いて御證明になつて居れども、隨分苦しい證據である、否斷じて證據にならないのみならず、却て反對の理由を立證することになつて居る。其の反對に立證する事を御話したいが長くなるで止めまするが讀むで御覽。よく反對の理由が分る筈である。而して自力他力と云ふことが次に書いてあるが實に抱腹の至りである。佛法元來自他なし、自他論は教家が勝手に（否方便に）附したる名目である。然るに我が宗自ら自力門だと云はねばならん理由は一點もない。見よ正傳の我が佛祖、誰か我が門は自力宗なりと云はれましたかを、若し罪深き此の己れを捨てゝ彌陀にお任せせよと云ふが他力ならば、我が宗位他力の純なるものはない。見よ坐禪儀に心意識念想觀を捨て作佛とも圖らずと云ふではないか、其の莫圖作佛の正當直に彌陀だ、否活如來だ、否自性三昧である、歸家穩坐である。

また彌陀願船に乘じて打ち任せて、己れの許らひを忘れよと云ふ淨土門も自力の純なるものである。見よ己の計らいを絕對に捨て願船に離れん樣にせねばならん。是れ大難事なる自力ではないか、淨家に難中至難と云ふ所以なり。イヤ其の願船も自ら乘るのでない、彌陀の力で乘らせて貰ふのであつて自力でないと云ふが、然れば我が門の坐禪も人の强爲なりと雖も、法の云爲なり。亦た本證に周旋せらるゝなりで、決して罪深き自己がするのではない、自性佛の力である。如斯自他力で門を分ち難易を云ふは方便建立の說である。然るに法に自他を分けて、坐禪自力念佛他力と云ふは未だ活佛法の義にあらず。

第三本願第四淨土も別家とすれば不可なしと雖も、總府としては定めることは不可

能である。此の本願淨土外の法も釋尊の說き出せるものである。若し不必要なれば釋尊何に依てか說き出さんや。既に說き出せる其法寶も他宗では其一部々々しか受持せぬのである。我が宗に非ずんば何宗に依てか總覽せん。第五依經に至つては前來の文意一讀下の人に對しては說明するの必要を認めず。殊に祖語は佛經より不可であるの釋尊の前に祖語の讀誦が不可であるの、讀誦は訓讀に限る等の御話に至つては、總府宗としては愈々その不可なるを知るのである。殊に「開山は御短命であつたから自力向上の坐禪の方面は、或は遺憾なく說き玉ひしも、他力や向下の說法は其の間を得ず遷化せられたのだ」との御話に至つては、餘程の素人は或は迷ふかも知れぬが、妄想の色目鏡を掛けぬ人なれば、坐禪儀一卷拜覽した丈けでも、其樣な惑は起り申さんのである。

開山は如來の正法を迦葉に達磨に如淨禪師に相傳せられしものを相傳せられたのに外ならんのである。決して一種新奇の立敎開宗者ではない。開山は坐禪儀と大淸規の御選述あればそれで好いのである。而して開山二十五年の說法は予等の百年間の仕事に勝るのである。實は却て少々法語が多過ぎると思ふ。多いがために斯る妄想が起るのではなからふか。而し此の說も、釋尊本尊論も、釋尊稱名論も讀誦は訓讀に限る、と云ふ說も皆な隨分古い陳說なので、高田師の新奇論には非ざれども何れにしても好くないことは好くないのである。妄想家の妄想を集めて妄想宗を御作り下さるよりは、其の御熱心の力を傾到して我が正傳の禪風を御擧揚被下る方が何百倍法の爲めになるか知れませんのです。

四　三種成佛義を評す

三種成佛義を評さる一段は、我が宗としては愈々何の事か分りません。念佛の事は且く措き、我が宗には受戒成佛などゝ云ふ樣な方便說や二元論的に戒法を見ては居りませんのである。受戒は佛弟子（僧俗を論ぜず）となす法である、佛家に入り佛子となる法なのです。今日の言葉で云へば信仰統一にあるのです。見よ、比丘となるにも

受戒である。優婆塞となるにも受戒である。如何に純信の男女がたとへ一週間純一に化行して受戒したからとて、見性成佛する人は一人もないのが證據ではないか。見性成佛せないで妙證を體得するものではない。妙證體得せないで成佛と云ふことは斷じてない、換言すれば自性了々ならずして、思想界妄想界の讖浪情波の中に漂々して居るものを、成佛とはそも何の事です。たとへ彌陀や受戒の法を一時的にも信じて、漂〻を一時休するとしても只一時的である。其の一時的休止中と雖も、絶對一道の那一着を聞いて見るも、答へ得ることは斷じてできまい。此の最大事が一向分らずして盲目落付に只落着いて居る衆生を黑暗屈理の迷執と云ふのである。成佛などは飛んでもないことである。

人あり云はん、然れば衆生受佛戒云々の佛言は如何すると、曰く是れに二義あり、一つには衆生受佛戒とは、那一着を體得した時を云ふ即ち大事了畢歸家穩坐の時が受佛戒である。二には一歩下つて、今日素凡夫の受佛戒は、法成佛で人成佛でないのだ。

たとへば赤子も長者の家を相續すれば、財産の全部も其の人のものなり、權利も家長たる權利は具はるのである（法受佛）が、御當人の赤子は依然として何にも知らず（人未成佛）のと一般なり。要するに念佛や受戒は（右の第二意）は斷じて成佛するものでない。此の理が明了でないから一方には三種成佛など、齒の浮くやうなことを云ひたくなり、一方には禪風の興隆を度外にする樣になるのである。坐禪三昧を除いては實地に人の成佛は、他に決してないと云ふてもよいのである。其の外一切の佛事は、要するに只結緣となり、道緣を濃厚にするまでのことであると信受奉行せられたし。

依つて宗門が修證義に依つて信仰を統一すること何の不思議もなく、何の新奇の法でない佛祖正傳の千古の宏範である。禪と戒との輕重論は當らない。戒に依つて佛家に入り、禪に依つて家業を營むのである。だが內容は禪戒一如であるから、禪中戒を離れるに非ず、戒中禪なきに非ざる事を知るべし。祖書の獨學や修證義の獨考位で、佛意祖意が斷じて分明するものに非ずです。否妄想の支配を受けざる人なれば、一讀

下佛祖の深意明了となる筈であります、見毒の恐るべき、御高推を乞ふ。

五　疑惑生君に御注意

開山の正法眼藏涅槃妙心は、坐禪儀一卷に明了々白的々に道破せられて餘蘊なし。向上の法門も向下の垂手も此の外にないのです。其の他幾多の御著述も、要するに此の旨を横拈倒用し、親切に注脚を下し玉ふに外ならんのです。隨つて此の旨に違背する異端邪說は禪風の衰退に隨つて續出すべきは必然なれども、斷じて御迷ひになる必要はありません。其の樣のものにお迷ひになるお暇があつたら、第一坐禪儀を能く御參見被下たい。第二更に一歩進めて正師に就いて實地坐禪をなされたいのである。

此に於て少しでも眼が開けば、塵の如く雲の如くに起り來る、世上幾多の信念上の誘惑を所斷する、快刀の亂麻を切るが如くである。否芙蓉峯の泰然自若として雲塵あることを知らざるが如くなることを得るであらふ。此の法を外にしては誘惑に打ち勝つ道はない。

六　高田師に御注意

二十五年間筆敎傳道の獨尊佛、行持綿密學殖深高の大菩薩の御稱道に對して、淺學寡聞殊に筆耕貧弱なる小生なれども、愚者の一得の力を以て知者の一失を補はんとするもの、共に是れ法の爲めに、其の身を忘れての御注意は笑納を冀ふのである。師の此の御提唱は時代に適應する轉法輪なるや必せり。小生も一宗派としての御稱道なれば誠に大賛成と存じます。釋迦佛稱名には異論のあることを聞いて居れど、其樣な小理屈に耳を借す必要なく、依つて一宗派として此の五要素の下に熱心に稱道すれば、全く不惜身命に擧揚すれば、非常に光輝を發揚することが出來ると思ふ。

然れども此の主義が直に正傳の佛法と一致するかの如く御稱道下さるに至つては、斷じて其の可なるの道理を見出すこと出來申さず。只自己の信ずる方法の下に、自己に有緣の者にお勸めになると云ふ丈けなれば、そこが我が宗の我が宗たる所で一向差し支へはありません、彌陀觀音大日椅子竹木何でも宜敷いけれども、此の五要件で正

傳の佛宗を一定せんとすれば、萬差の機類が其の化を受くることを得ざることゝなる。亦佛祖の境界は斯る小なるものでない、また斯る眼花のあるものでないから、斷じて御賛成出來ないのみならず、法の爲めどこまでも御注意せねばならぬのである。而して二三十年前の隨意布教時代なれば御勝手の布教も不可なしとせんも、既に正傳の佛戒に依つて信仰統一の標準も、凡俗にも知れるやうに修證義が出來て居る今日なれば、隨意の布教も必要がないのである。

若し修證義では云々の御意見も拜見しましたが、實は失禮ながら正傳の佛法にも、修證義の佛戒にも、聊か御眼識の徹底致して居らぬことが明了に見取れる樣子であるから、今一回放身捨命の御修行の上御一考を御願ひ申上たいのである。我が宗の宗風に滿足できないとなれば須く立教開宗するのが法の爲めではあるまいか。然らざれば有緣の信者に隨所に御施しになるが宜敷い。上來は小生の一直感のみ。なほ不明なれば、後更に申述る機會もあることゝ信ずる。

一一、洞宗本尊の不定に就て

問　曹洞宗の寺院に於て本尊の一定せざるは如何なる理由に依るものに御座候や。（岩手縣。門外漢生）

答　現代より見たる曹洞宗と、既往に於ける洞上とに分けて一瞥せねばならぬ。

一　現代の洞宗

現代に於ては我宗は佛法の總府である。總本家であると云ふ事は、洞上兒孫の信徹する所ではあるが、實際は只一宗として各宗の間に立つて行かねばならん時代である。則ち各宗とも皆別家を以て任ずるに非ざれば、各宗共本家を以て任じて居る時代である。

此の時に於て我宗のみ本家であると只澄して居つては一宗としての存在も危くなるを免れんのであるから、維新以來こゝに見る所があつて、總府たるの精神を失はざる限り我門は我門として、旗幟鮮明に他宗と異れる信條の下に、一定せる布教傳導をせ

ねばならぬと云ふ考へより、修證義をも編輯するに至つた次第である。

サテ此立場より觀じ來れば我宗の本尊は教主釋尊と一定する事は惡くない事と思ふ。然れ共我宗門の根本精神より見來れば敢て必らず固執すべきものではない。

二　既往の洞宗

既往に於ける方面は、予は歴史上の考證などを話す暇もないが、宗門の精神を以て既往を察するに、我面授の正法を傳承し來れる宗門には、印度にも支那にも古來寺は唯修行專門の道場であつたのであるから、本尊を何佛、何菩薩と是非共定めねばならぬと云ふ問題は無つた。其後百丈が清規を定め、叢林を開創した時、釋尊を本尊とせられたと云ふ事であるが、他の佛を本尊とするは惡いとは云はなかつた。隨つて其後支那に於ても日本に於ても本尊は一定して居らぬ。

是れ一は重きを修行に於て本尊におかぬ爲と、二には寺ある以上第二義門より本尊を安置するも惡くないが、安置するとせば其の土地に有緣の佛菩薩を安置し奉るの好きに如かずとするにある。

三　禪宗の本旨

一指頭是如來なり。一莖草上寶王刹なり。彌陀佛を念ぜず、南無乾屎橛である。況や三十三身、隨所に本尊を現ずるの大理想を實地に實行するのが活佛心を活傳ぜる佛法の總府たる宗門の面目である。別に其の土地に有緣の佛菩薩なく、且開創者に特に何等かの希望がなければ、釋尊を本尊とする事として、別に開創者、又は其土地に有緣の佛菩薩があればその佛菩薩を隨意に奉祀する事は、我門としては頗る適切な事と思ふ。此の道理よりして古來本尊を一定せないのであつた。

一二、洞宗所依の經典

圖　禪宗には所依の經典なし、隨て總ての經典は所依なりと云ふも、主に法華經を用ひて、淨土三部經を用ゐざるは如何なる譯に候や、或は曰く法華經は佛陀の本懷を說けるものなれば之を用ゆと。然らば禪

宗は天台教判を襲用せるものなりや如何。　（和歌山。西脇流水）

答　我正傳の佛法を禪宗と云ふことは御止め下されたし。さてお說の如く他宗門には一經一論を所依の經典として居るけれども、我宗門には一卷半字も所依の經典はない。隨て何經も取らず、何宗の判釋にも依らぬ。宗門幾多の祖錄や法語あるも無論一點も亦執る所でないのである。

昔し潙山仰山に問ふ「涅槃經四十卷あり、多少か是れ佛說にして、多少か是れ魔說なる」と仰山曰く「總に是れ魔說なり」と。潙山此答を得て仰山の道眼圓明なるを稱讃して居る。我門の眼睛開けば斯くなくてはならんのである。孤り涅槃經のみならず一大藏經も總て是れ魔說である。禪門に傳はる汗牛充棟の祖錄も悉く邪說である。況や各宗の敎判の如きは皆な悉く邪魔の臆說に過ぎぬ。

然るに各宗の人たちは、此天空海濶の世界あるを知らず、一經半論に擒はれて自縛自縛の苦患に墮るのは誠にお氣の毒に思ふのである。既に一切執らずと雖も、黃葉の止啼錢であるから、一切捨てはせぬ。既に用ゆべきに當つて用ゆる時は、塵々悉く大光明を放たしむるの妙手があるのであるから、一切の佛經祖錄も諸宗の敎判も皆金科玉條である。

此立場に立つて時所位相應に取捨するので、決して法華經を取り、三部經を捨てるなどゝ云ふが如きことは一點も我門にはない。現に其傾きあるは只時所位の適否に依る差配のことに過ぎぬのである。

一三、臨濟禪と曹洞禪

問　不立文字敎外別傳の禪門に、黃檗、臨濟、曹洞の三宗あり、方今弘く世に行はるゝもの曹洞、臨濟の二宗とす、而も等しく如來の正法眼藏涅槃妙心を諦得するを以て目的とするに拘はらず、兩宗其禪旨に差別あり、提携の手段に相違あるは如何なる譯にや。幸に洞濟兩宗の禪味を會得せられし老師の垂示を得ば幸甚。（東京。學道山人）

答　今、臨濟禪と曹洞禪と申しても、其の向上の一大事に到つては、一點の相異もな

いが、兩々その宗風の別はありとするも、決して別旨を云爲することは出來ない。然し時勢の潮流といふものは仕方のないもので、その時勢に應じ、人處の如何に應じて、誘導の手段を異にせねばならぬことは、今日ばかりではなく昔も同じことである。從つて吾が曹溪六祖正傳の一佛心印が、青原南嶽の兩系を出し、正傳佛法の表現形式が兩師の氣質や所住の風土に隨つて、その色彩を異にしたのは自然の勢であつて是れが活佛法である。そこで今曹洞臨濟の兩禪といふ問所に對しても、兩者の間に根本的差等を辨ずるのではなく、只その爲人の手段に多少の異りたる點を示すに過ぎない。つまり兩宗の禪旨に差別を見るのでなく、禪風に就ての相異をざつと話したいと思ふのである。

一　臨濟將軍曹洞土民

さて曹洞臨濟は青原南嶽に分派の源を發して居るが、其の宗風の差異を大體に於て云うと臨濟は機鋒峻烈の家風、曹洞は綿密の宗旨と言はれて居る。之れを譬へて臨濟將軍曹洞土民といひ、臨濟は恰も將軍が威風堂々駿馬に跨り、猛虎の勢を以て外敵を薙ぎ倒す樣に、自性清淨なる本地の風光を汚穢す妄情迷執の雜病を一氣に推倒するに、擊石火閃電光の活手段を用ゆるのであるが、曹洞は恰度百姓土民が、野や畑に出て米穀の成茂を害する雜草を、一一叮嚀に引き拔いて、一草も殘さず刈除する樣なものであるとの譬である。則ち自己心性を行住坐平常の一切時處に於て、身口意上に一點半事も本分を離れない樣に、綿密に參徹せしむるにあるのである。蓋しこの相異は、曹洞の源泉である青原派は、正傳佛法その儘を承得して、接化爲人に變つた手段を用ゐず、至極穩健に所傳の法その儘に單傳し來つたのであるが、臨濟の源である。南嶽以降は、時勢に應じて手段の變遷が多かつた樣である。

唐の末葉から宋の始めにかけて、次第々々に盛に行はる樣になつたが、宋朝に到つて最も盛になつて來た。殊に大慧師に到つて公案を以て禪に於ける必須の條件の觀を呈することゝなつて終つた。茲を以て臨濟下の禪を看話禪と呼ぶに及んだのである。

之れに對して曹洞では當時宏智禪師が代表的人物であつて、亦盛に一切手打ち拂つた只管打坐の王三昧を稱導せられたから、世に呼んで默照禪の名を與へたので、此の看話默照の名はその後臨濟曹洞の兩禪を代表する名稱とまでなつたのである。宏智の默照禪といふのは、本地の風光に直入し安住せしむるの大道として、只管打坐を重んじたからで、大慧の看話禪といふのは、本地の風光を開明する手段として公案を與へるからである。則ち曹洞宗は乍入叢林の第一歩より、直ちに凡聖等一の三昧に入らしむるにありて、臨濟宗は轉迷開悟の捷徑を進ましむるを最要とするに外ならぬのである。從つて其の手段にも峻烈と綿密との兩風が窺はるゝのである。曹洞禪には五位、三滲漏、三路等あり、臨濟禪は三玄三要、四料簡、四唱等を以て知ることが出來やう。大慧禪師が看話默照の相異を「宏智は定を先にし慧を後にす、我れは慧を先にし定を後にす」と言はれて居るが、要するに看話禪は見性の智見をシボリ出すことを主とし、默照禪は默通の定を重く見るのである。然しながら之れとても、兩者の間に於けるや手を取つて衆人を接する修行上の差別に過ぎないのである。故に定中に慧あり慧中に定を具す、定慧不二。是れ眞の佛法なることを忘却してはならぬ。

二　自勝他劣の僻見なし

斯く大慧及び宏智に依つて、形式的差別觀を施設した爲め、その流下は自家の優勝を擧して互に爭つた樣であるが、大慧宏智の兩師が、畢生無二の法友であつた事から窺つて見ると、兩師の間に自勝他劣の僻見なく、唯定慧不二の本地に座しながら、僅かに修行上相對的色彩を表はしたに過ぎなかつた事が思はれるのである。而して宋朝以來の兩禪風は我が國に傳來してからも、一は公案を用ゐる看話禪を、他は無公案の默照禪を標榜して、兩宗その旗幟を飜して來たのである。

然らば、兩宗の家風を代表する看話默照の間に、悟道上何れ丈の徑庭があるかというに、兩者の間に於て決して勝劣遲速を立することは出來ない。道の芙蓉峰に登るに當つて、看話は公案といふ金剛杖を與へ、杖と人と一如、その一如も忘れて登るまで

のことであるし、默照は杖も捨て人も捨てて登るのであるから、眞に一如一體の時は杖もなければ人も無く、唯驀進するところに、本地の風光は現成するのである。

されどその過程に於て、兩者何かの方便を取るからには、兩者に相異するところがあるに違ひない。濟下には十牛圖にある如く、或は機關、法身、言詮、難透等の公案を幻設して、途上の風光を愛でつゝ、自己本來の佛位に即せしめんとする。けれども是等は畢竟するに月を指すの指門を叩くの瓦子であつて、法は元無法、方便は元無方便にして、即處是れ自己本來安住の佛位である。然し佛事門中不捨一法であるから、必要の機に對しては取つて以て、自性を徹見するの鍵とならねばならぬ。此の意を分明にすれば、看話可なり、默照亦可なりである。然しその弊の伴うことは數の免れざるところで、看話默照何れもその弊に陷り易いものである。

三　看話默照共に弊あり

看話は先づ階級病に陷るを見る。祖師は常に三賢十聖の窺ひ知る處にあらずと呵責せられるが、ウッかりすると其の三賢十聖の惡流に汲ひ込まれる。又は分別智解を以て悟れりと思ひ、型に篏まつて行けば其内どうかなると思ひ所謂相似禪的病に陷り易いのである。默照禪は初めより階級を立てず、初心の辨道直に是れ本分の全體全用であると提示するが故に、無事禪默々禪、おさん鍋釜その儘禪の惡平等に墮して、只僧侶は僧侶らしく、俗人は俗人で暮すのが綿密なる行持である、佛作佛行であるかの如く誤了し、無眼子が人天の導師振をする空見識に陷る弊がある。

そこで衲は公案禪の裏打ちをするもの、無公案禪は公案禪を裏打ちして、始めて眞實の禪法は了得せられるものであると思うて居るのである。否さうでなくては、正傳の佛法を自由することは仲々容易であるまい。譬へば臨濟將軍の下に曹洞土民あり、曹洞土民の下に臨濟將軍在つて禪の國土は確立するのではあるまいか。看話默照兩禪の融會は、之れ眞實佛法の一大關門を透過せしむる金札であると信ずるのである。

公案禪を十年も十五年もやつたといふ人が、無公案の洞禪を怪しみ、公案なくて修

行の出來るとは分明ならぬといふのが能くある。實にお氣の毒な事だ。夫では無字の根源一つも未だ分らぬと見へると言ひたい。又無公案の默照禪師が、時々公案を貶下するのは、公案に依り又は無公案に依りて、會得する處の眞意義を知らないからである。夫れで看話禪と雖も、公案以外に無公案底の正三昧ある事を了知し、默照禪も亦無公案中公案透過底の知見ありて現前する事を忘却してはならぬ。公案無公案といふも、正に打成一片であるべきである。如何なるか是れ無公案、山は自ら高し、如何なるか是れ無公案、水は自ら流る。

四　向上の眞風に差別なし

要するに、臨濟禪といひ曹洞禪といふも、其の向上の眞風に於ては更に別異の存するものではないが、その道得の過程邊に於て、その風を異にするのみである。看話の法眼圓明、智見精倒、正念工夫に油斷なからしめ、學人誘導に便宜なる長所と、默照の純一無雜の正修行、方便手段を捨てゝ、佛祖の堂奥に大尊貴生なる長所とは、何れも三業に佛印を表はし通天徹地の金剛上に直入し、眞實の佛法に同死同生するを得るのである。只哀れむべきは、臨濟禪も今や午後三時頃である、年一年と眞風地に落ちる樣だけれども未だ明るいから好いが、洞宗は五十年已前全く宗風落地してしまつた樣である。けれどもそろ〳〵旭日は將に東方の地平線下にまで來て居るやうな感じがする。一つは猶明るいが一つは未だ全く暗い。兩宗共に奮勵一番せねばならぬ時である。

一四、現代相似禪評論の評論

問　拜啓「現代相似禪評論」なる著書出で、禪海に一瀾を起しつゝあるやうに思はれ申候、小生も聊か禪修養に志有之候處、彼の評論の說に依れば今や全く禪無きが如く、果して現代に禪なきや否や、一體相似禪とは如何なるものに候や、且つ其以外に如何なる禪ありや、彼の評論の說は皆眞實なりとすべきや。否や一向不明にて甚だ迷惑致し候、明快なる師の批評及御指南を御願申上候。（東京。求道者）

答　御尋ねの如く此の新著書に對しては、初心の修行者は大分に頭を動かして居るものもあると見へて、既に此の著に對して二三の質問を受けて居ります。しかし多忙の爲

め此の書を未だ熟讀一片したことがない、只一晩さら〳〵と通覽した丈けであるから或は見落もあるかも知れぬけれども、大體に於て此の書の內容を見屆けた心得であるから、小衲の感じた丈けのことを以てお答することゝするが、多少長くなるから三四段に分けて述べることとする。

甲、先づ禪を大觀せよ

一、緒言
二、靜慮禪
三、迷悟禪
四、自性禪
五、圓融一貫の大道

乙、現代相似禪評論に對する所感

一、緒言
二、著書の內容
三、著者の境涯觀
四、功罪兩途あり
五、結評

甲、先づ禪を大觀せよ

一　緒言

さて方今頻りに禪と云ふことが流行するけれども、禪とは何ぞやと問はれても、明確に答へ得る者幾人かある。若し答へ得るとするも其の答へ得る所は、禪海の一波兩波を識取して以て禪の全體なりとするにあらざれば、飛んでもなき因循固息を以て禪とし、或は放辟邪恣を以て禪とし。甚だしきは我見我執を以て禪と心得る者すらあるに至つた。

而して其の一波兩波を云ふものは公案工夫が禪の全體であると思ひ、或は淨裸々の打成一片のみが禪の通身であると思ひ、或は念佛觀慈悲觀數息觀のみが禪の全生涯であると思惟して、その一を執してその他を誹謗するを以て能事と心得て居る者が多いやうである。禪の手段豈百千のみならんや、如來一代の說法は唯禪を示し給ふに外ならんのである。八萬の法門は皆禪の活手段なりと云ふべし。

然るに其の言葉に捉はれたものを敎者沒智と云ひ、其の言旨に徹したものを禪と云ふのである。殘念な事には、今や公案の敎者あり、無公案の沒智者流の多くなりしことを、依て先づ禪道を大觀して、禪ならざるものを禪としたり、一隅の禪を全體なりと誤らぬ樣に致さねばならん。

二　靜慮禪

落付くことである、精神を統一し更に無我の境に突入して、徹頭徹尾落付くことである。此の靜慮禪にも深淺廣狹實に無限である。其の極所を云へば一年十年乃至無量時の間無念無想の境に入ることすら出來得るに至るのである。さて一言に禪と云へど禪には凡夫禪三乘禪外道禪佛祖正傳の最上乘禪など深淺廣狹大小正邪曲直あり。斯く種々の禪ありと雖とも、靜慮の禪は實に右一切禪の根底であり、基礎であるてふ事を忘れてはならむ。

此の靜慮禪は、無宗敎者も外敎者も、佛性を信ずるものも信ぜざるものも、正因正果の原則を知るものも知らぬものも、或は軍人も敎育家も商人も皆實行すべき根本道である。佛法よりは此の禪を凡夫禪或は三界定世間禪等と云ふのである。此の禪を說明の都合上分類して冥想禪、無念禪、無着禪として說明せば、第一冥想禪とは佛經祖錄中の聖訓或は賢哲の金言等を打坐上に靜に玩味するとか觀念するとかの類であつて心を用ゐて精神を一所に集注することである。彼の耶蘇敎の祈禱とか、藤田式靜坐とか平井式の三摩地療法等は此の禪の一端であると思ふ。

第二の無念の禪とは種々の方法の下に何にも思はずなり行くことである。彼の岡田

式のボンヤリ坐の如き、中村式の凝念法の如き此の禪に類すると思ふ。第三無着禪とは冥想することもなく、無念を欲するのでもなく、たゞ只管に打成一片に打坐するのみである。佛法の根本禪は此の坐にある。無公案も好し公案も好し念佛唱題亦惡しからず。而し其の要期する所は只是れ靜坐にあるのみ、其の外何ものもない。されど落付とは消極的に云ふのみなれど、積極的に云はゞ落付きが出來ただけそれだけ（盲目的なれども）世界自ら平穩になり、自性の本德に一分づゝ冥契する樣になるものである。

三、迷悟禪

上來靜慮禪の力に依つて心界自ら平穩になり、識浪情波が惡動せざる其の上に人〳〵本具の佛性の法門を屢々耳にして、自然その靈性あることを信受するに至り、其の靈性を徹見せずんばある可らずてふ志が起つて來た者の修行であるから、最早世間有漏の定ではない。則ち轉凡入聖の禪であり轉迷開悟の定である。世間法には非ず全く佛法に取り切りの禪である。

さて禪を便宜上分つて、相似禪と漸悟禪と頓悟禪の三段として說明せんに、先づ第一その相似禪とは既に本分の一大事あることを知つて轉凡入聖せんと欲して、修行する中に、追々と境界純熟し、朦朧として本分の風光に接し初めて、相似に（本物に非ざること）一法の境界が顯れて來る邊を云ふので、天台の所謂る相似即にも當るのである。

此の禪にも公案と無公案の兩手段あり、其の無公案禪は師家の指圖通りに只管に打坐してグン〳〵推し通して行く處に自然と相似に法身に冥合するのであるが、彼の無事禪に墮するのは實に此に陷るのである。而して公案禪は先づ一則の舊公案を與へられて縱に咬み橫に嚼み、幾回か見そこない考へそこなふては、一種の窮地に陷り、無意識的にフイと此の邊だなと云ふ程の、小境界小歡喜を得て其の公案を透過し、亦一則亦一則と五十乃至百、二百と數へる所に一種の似非禪を得るのである。

然るに此に無公案と公案禪との長短を云はゞ無公案禪は定力足つて知見足らず、公案禪は知見足つて定力足らざる長短がある。喩へば無公案は足ありて視力是れに伴はざる如く、公案禪は眼ありて足力足らざるが如し、今や破有法王の痛嘆する所の禪は此に擒はれたる相似眼禪を云ふのである。

その漸悟禪とは、公案あり無公案あつて、打成一片の三昧に入つて、一年乃至十年もグン〳〵坐る所に時至れば、驀然として桶底を脱するの痛快事現成するものである。斯に於てか師たるものは其の一半を許し、數々の公案を以て且く其の程度の境界を錬磨せしむ。

其の内時節を見計りて亦た通過を許さず、更に大死せしめ、亦大活せしめて最後の牢關をも竟に一超せしむるのである。此の禪の修行は公案を工夫すると云ふも、相似禪の如く一種の思想禪とは全く別である。ドコ〳〵までも頭の禪でない通身の禪である。公案と眞個一枚になり切つて時熟すれば、現成するもので微塵ばかりも頭を要する禪でない。斯くて一段亦一段と進徹するを云ふので、天台の所謂る分眞即に似たる所あり、彼の白隱の大悟十二度と云ひ、趙州や雪峯の大悟十八度と云ふは此の邊の事である。

その頓悟禪とは前の如く漸進法に非ずして、一超直入如來地の禪にして、十年乃至二三年修行中、少々の悟道はたとへありとするも、魔境として師も顧みず、亦修行の當人も欣ばず、徹骨徹髓するまでは餘所見もせず、最後の眞實の歸所を體得するまでは一歩も許さず徹底殺し盡すにあるのである。彼の巖頭最後に雪峯を接する、雲門十五年間遠侍者を接する。正受老人の白隱を接するなどは皆この類である。

但し斯の如き惡毒の手段を施すほどの親切な師家は今や全くない。又たとへ斯る宗師ありとするも、斯る好手段を甘受するほどの鐵心肝を具へた學人は今や全くないと思ふ。祖庭の荒凉眞に哀むに堪へたりだ。然れども漸悟禪の師家はまだある、學人もある。漸々に末後の牢關を打破せば頓悟の機と敢て異つたことはない。

四　自性禪

實は自性三昧禪、或は本分の禪、或は佛向上の禪とも云ふことである。上來轉凡入聖禪を徹底し道眼圓明の境界に到達し了つたものゝ禪である。これも例に依て三階級に分つて說明するが便利である。一つには法臭時代二には無臭時代、三には超越時代と云ふて置く。その第一法臭時代とは自己歡喜の甚しき時代である。例へば暗夜に燈を得たるが如く、赤貧者が一朝にして萬金を得たるに似て、歡喜して手の舞ひ足の踏む所を知らざるが如き時代を云ふ。彼の大通智勝佛の十劫坐道場や、釋迦の三七日思惟の如き、德山の潙山に參ずる時節は皆此の時代の病氣沙汰である。

その第二無臭時代とは、前の歡善踊躍の法臭或は道眼と實際と不一致の苦痛もなくなり、ヤレ樂になつたと云ふ時で即ち功無功に到達したと云ふ一分の法臭猶ほ存することを免れざるものである。彼の潙山の七十三にして山僧近日胸中無事を得たりと云ひ、白隱の七十にして歸家隱坐を解せるが如きか。

その第三超越時代とは、眞個悟相をも超脫する時代である。況や分段變易の迷悟生死をやである。迷悟の論量生佛の邊際を一超して、徹底了事の凡夫になり果てたる。沒量の大人を云ふのである。佛向上と云ひ佛境界と云ふは此の邊の消息を云ふものか。

前來靜慮禪迷悟禪、自性禪の三階級に分ち、その靜慮禪は、一切禪の根基禪にして、佛法禪に入るにも必ず一往修すべき、素養的禪である。今や相似禪者はこの素質も造らず、佛性因果も信ぜられぬものにも、直に相似的公案を與へるから何にもならん。全く害あつて益なしだ。

迷悟禪は佛法に思覺時代則ち悟を以て則とする禪なり、而して自性禪は更に本覺の大圓滿覺海禪と云ふべし、その靜慮禪にも冥想無念無着の三期あり、迷悟相似漸悟頓悟の三階級あり、自性禪にも法臭無臭超越の三前後ありて、三三九階級に分類して且く說明したのである。その靜慮禪丈けでも初中後淺深實に日星の差のみならんや、迷悟禪の初後は實に雲泥の比にも越えて居る。自性禪の初中後に至つては實に喩ふるに

物がないほどの相違であることを知らねばならん。實は機類萬差否萬々差であるから階級も百千萬無量であるのだ。

然るを素養的時代の人物にして、直に始覺禪の迷悟禪に亂入したり、甚だしきは直に本覺禪の自性禪を亂道したりするから、正法即ち邪法となり、佛法即ち無義の法となり了るのである。請ふ方今の亂禪者流よ佛陀の四十餘年未顯眞實の眞精神が分りまするか。咄。その機その機に投ずれば、一切の禪皆佛光明を放つのであるが、若しその機に親しからざれば如何なる法も法でない。方今は如何なる程度の機類に對しても、相似禪のみを亂道するに非ざれば、自性三昧の禪を說かんとする似非禪者の多いのは長歎に堪へない次第である。妙觀察智の修行眼力を養ふ底の宗師なきか。

而してこの靜慮迷悟自性の三禪に各々三階梯あるから三々九階級であるが實は靜慮は迷悟自性にも通り、迷悟は靜慮禪自性禪にも徹すべし。

自性の妙境も靜慮禪にも迷悟禪にも完具して居るのであるから、實は九階梯各九階位を具足して九々八十一階級の進淺高下あることを知るべきであると共に　實は數百數千の階梯がある分けである。而して其數千萬の階級ありと雖とも始純一貫の大道ありて存するのである。其一貫の大道是れを無階級の王三昧とも云い。初心の辨道即ち本證の全體なりとも云い。自家の坐床なりとも云ふ。則ち任運堂々の打成一片なるものなりとす。其一貫の大道の審しいことは次段に讓る。

五　圓融一貫の大道

上來は靜慮禪に於て妄動する識浪情波を靜めて伏惑の行を修し、迷悟禪に於て根本の識源を打波して斷惑入理せしめ、自性禪に於て自受用王三昧に安住して、盡未來自行化他せしむべき、淺深前後次第あることを略說し了りたれば、人亦誤つて其の次第深淺の過程に捕はれて、初後一貫の大精神あることを忘却せんことを恐れ、此に初後圓融一貫の大道を說破することゝしたのである。

夫れ圓融の大道は、衆生本來成佛、或は衆生本際解脫であるけれども、唯妄想分別

のために識得し難きのみ、古人曰く只凡情を除け別に聖解なしと、依て禪の大要領は只凡情を除くにあるのみ、眞裸かにするにあるのみ、打成一片にするにあるのみ、大死一番するにあるのみである。然れば靜慮の初より自性の終るに至る迄、其の境界の深淺は實に喩ふるに物なき程相違すれども、ソハ禪の深淺に非ず境界の深淺である、禪は始終一貫の法よりない。其の一法とは何ぞや、曰く、大死了のみ大赤裸のみ、打成一片のみである。然れば靜慮の初心も要は打成にして、自性の大人も打成一片に外ならぬのである。

隨つて禪に百千の手段ありと雖ども其の要は只管打坐あるのみである。八萬四千の善巧方便も其の內容は打成一片である。打成一片は是も實に入道の精要にして、又實に大道それ自身である。是れを無階級の正法眼藏涅槃妙心とも云ひ、活拳頭とも云ふのである。此の無階級禪を信ずると共に、有階級を忘れず、此の有階級禪を信ずると共に無階級を忘れず、階級無階級回互圓轉の妙旨を深く諦信して、把放時に臨むで四來の諸機に接待するこそ殺活手にあり驢を度し馬を度する沒量の大道人と云ふべきである。さて如斯禪海の內外精粗を大觀し了つて彼の評價を一見せば言を費すこと少くして、彼の曲直是非一時に評過することを得るのである。

乙、現代相似禪評論に對する所感

一　緒言

現代は各宗とも其の教理の研究者こそあれ、實地の修行は全く地を拂ふてしまふた換言すれば其の宗の哲學丈けは殘存して居るやうだが、宗旨は全くなくなつてしまつたのである。けれども禪門だけは哲學攻究に重きを置かず、實地の修行に全力を傾注せしめる宗旨丈けに、比較的未だ生命が殘つて居るやうだがそれにしても洞濟兩宗共眞生命が餘程覺束なくなつて來た。

目下の處濟下の佛法は未だ明るい樣でも、既に午後三四時頃のやうな氣がする。洞

上の宗風は四五十年前既に闇夜になつてしまつたのである（一個半個は殘燈を挑げて居つたとも云はれるが）ダガ今や東天微光を認めんとする曉天前の機運に向つて居るやうな節なしとせず、ではあるが未だ全く暗い。濟下は日沒前の感あれども未だ明るいから尊く思ふ。

さて洞上の宗風の落地した原因は、功勳の修證を忘れたる無階級禪に墮したが爲めである。濟下の墮落しつゝある原因は、無階級の正禪を忘れて、活版摺的公案の階級悟に墮したからであると信ぜざるを得ない。喩へば東西に一貫する大道ありとせんに、濟下は北へ北へと歩いて道を踏みはづせるが如く、洞上は南へ南へと歩いて道を踏みはずせるに似たり。則ち洞上は無階級正的の本分禪に重きを置きし故に、第二流の人師誤つて無事甲裡の禪に墮落せしめたのであり、濟下は公案階級の兒孫邊に重きを置きし故、第二流の人師に依つて活版刷的階級相似の意識禪に墮落せしめんと志つゝあるのである。

願はくは二者親しく手を取つて南北に分るゝ事を愼み、東西に驀進すれば眞風挽回するに遮幾からんかと信せずむばあらず。而して今は濟下の現代禪に對する評論の批評であるから洞上の事は且く措き、猶少しく濟下に關する右の所感を布演せんか。

現代と雖ども、濟下一流の正師は兎に角として、其の第二流の人師は確かに漸悟禪の初入の所、即ち徹骨徹髓の見性すら覺束ないものもあると思ふ。相似禪的の卒業者が大分にあるやうである。十年五歲只管に公案禪を修せし所謂の舊參の禪士から、時々奇問を受けた事がある。曰く、公案なくして坐禪になりますかとか、或は非思量是坐禪の要術也とあるが如何あることかとか、或は公案なければ無事禪であると眞面目に問はるゝに至つては寧ろ愍笑を禁じ得ないのである。

請ふ見よ、唐朝已前の禪に公案工夫と云ふことがどこにある。如來の會坐に公案があつたが、印度及支那の上代の祖師に公案工夫と云ふ事が無いではないが然れども佛祖の正法は皆明らめられて居るではないか。殊に況や公案を前後次第して組織的に制

定し、且つ其の所見を呈する方式及言詮に至るまで、殆ど活版刷的に一定して、其の一定式目を通れば卒業とし、其の式目に契はざれば修行に非ず禪に非ずとせば、白隱老漢以前には禪なしとするに似たらずや、大慧の看話も、如斯煩雜なる形式を逐ふたものではないのである。彼等の手より白隱所定の組織的公案と、其の所傳の書入れとを奪ひ去つたら、猿猴の木を失ふたやふなものかも知れん。若し眞の佛法を知らんと欲せば右の二物を奪ひ去つて、一炬に燒却して初めて眞を知るのである。

但し元より白隱老漢を是非するのではない。白隱は是確に簡出の禪將である。老漢は赤手空拳にして、千變萬化し來つて、當時の盲目禪を治療したばかりである。見よ、看話禪の始祖とも仰ぐべき、大慧は圓悟の碧巖すら一炬に付したではないか。何の爲めである。要は碧巖を執して禪であると思ふ病氣を未發に防いだのである。碧巖にも禪はない。況や白隱所定の右の二物に禪ありと云はゞ白隱の兒孫でないのである。兄等も相似的とは云ひながら鐵嘴覺の先師に此の語なし云々の公案も通つて居りながら、白隱に此の二物ありと思ふてはなるまい。

亦素養的禪則ち靜慮禪すら知らず、因果の道理すら信ぜられず、況や常住佛心の信なき赤の素凡夫に對しても、直に迷悟禪の眞似なる、相似中の淺相似禪的に、舊公案をドシ〳〵見せしむるとは實に沙汰の限りである。それは一體何の眞似なりや、狂にあらずんば邪である。佛法に非ず、世道に非ず、一種の遊戯なるのみ、斯ることに貴重の精神と時間とを消費せしむるは、實に佛法の罪人なるのみならず、白隱の罪人であり、人道の罪人である。此の點より見て破有法王の怒るのも無理はない。否、相似禪下に參じつゝある心ある禪士は、餘程コボシテ居ることを屢々耳にするのである。

二　著書の內容

著書の內容とは云へども、一一叮嚀なる批評をなす餘白もなく、必要もなかるべし、依て概括的に評下し去らんとするのである。先づ、一に頗る親切なること、熱血を注げること能く當時の禪弊を指摘せること等數へ來れば實に近來稀に見る快著である。

決して賣紙賣名の書に非ず、又決して無責任なる出放題の駄法螺ではない。著者としては恐らくは一代の眞生命を法の爲めに傾注し盡したものと、推察するに餘りあるのである。

內容の是非は且く措く、予は其の全生命を傾注した所に、實に絕大の權威と痛快とを覺へて難有いのである。第二に議論ではないし、議論的に書けば徹底的に書かねばならん。隨つて頗る長編になつてしまふから、議論は總て拔きにするが、白隱老漢を見性未在とし、且つ白隱を相似禪の總本家とする議論には斷じて同意すべからずである。それについて種々例證を引いてあるけれども、却て其の反證となる所もあるし、又其の反證を擧げることも澤山できるのである。又若し一言半句の言尻を取つて以て其の境界を計らんとすれば、古來の佛祖皆外凡の人なりと云ふことが出來る。殊に我が永平開山などは、六祖、洞山、如淨等を除いては古來の佛祖を皆許して居られぬ處がある。臨濟德山の如きは特に未成品視して直ちに臨濟德山の知る處に非ずと示さるゝのである。然れども此の二師を決して徹所に徹せずとし玉ふに非ず、實習未だ除かず、法執未だ斷ぜざるなりとの意である。思ふに白隱の大度量を知らずして、時に對する隨宜の說法の跡を認めて見性了々を缺けるが如く、法王は思惟するのである。又今一つは、坊主憎ければ袈裟までの筆法で、當時に活版刷相似の公案を惡むの餘り、其の組織的學人誘引法を組織したる白隱までも肯はざるに至れるものか、請ふ法王よ又今時の相似禪者たちよ、白隱は斯る公案や隻手の中に晝寢して居ると思はないがよい。眞個白隱の法孫なれば、實に今時の弊多くして益少なき、白隱幻設の公案覺えの閑家具を一炬に付する底の人なきか。

永平開山は洞山の知己を以て任ずる偉人であるが、洞山の五位を一生涯口にせられざりき。凡そ一切の言敎は時に取り時に捨つべきである。把放殺活佛祖正宗の腕頭ではないか。第三に法王は相似禪を一概に貶する樣であるが、相似禪何の罪かある。其の他の禪何の長所かあらんや、實に法王未だ佛正法を知らず未だ相似禪を知らず。佛

法は取るべきに當つては佛事門中不捨一法であると同時に、取るべからざるに至つては佛事門中不取一法である。法王は特に相似を捨てゝ、特に何禪をか取らんとする。取捨は是れ我執より起るものなるを知るべし、若し特に取るべき一禪あらば直に須く吐却すべし。公案と無公案とを問はず既に靜慮禪を一超すと雖ども、自性識得の迷悟禪に入らしむる程の機未だ熟せざる者の爲には、玆に相似禪に入らしめて、且く純熟を待つのが佛祖の大機大用である。

機類萬差なるを知らず、猫も杓子も皆迷悟禪や自性禪に入らしめんとすれば、其の病、相似禪に擒はるゝのと一般にして、其の弊の及ぶ所前者よりも甚だしきものあることを知らねばならん。

第四に公案の室内調べの内容を忌憚なく暴露したる所頗る痛快である。尤も中には隨分杜撰な見所も澤山あれども、相似の形式に擒はれたる人師をして如何に驚倒せしめたるかゞ察せられて快い。只惜むらくは法王自ら信ずること能はずして何の爲めに入室したのである。師たとへ許すと雖ども、肯心自ら許さずして見所を呈するが如き何の惡戯ぞ、自ら法を遊戯視して他をせむる道何れにかある。

法王よ、相似禪と云ふと雖ども學人自ら是れは是れ相似禪たりと知るものにあらず、師家の方面にて云ふのみ。學人の手前では其の見所を全體全信したる上にて呈解するのである。其の水の漏れるやうな見解、否、自ら相似の遊戯と知つて入室するのは欺漫である、謗正法である。今日と雖ども相似禪者ばかりではない、見性了々の人もある。法王自ら迷背して知らざるのみ。

請ふ大慧の初めて圓悟に參ぜし時の如く、我未だ安心せず、然るに諸方の宗師皆我を印可す。和尚もし我を印可せば無禪論を書せんと云ひしが如く、二三の禪將に就て法王が見所の點檢を請へ、法王を許さずして、絶後再生の妙手を下す師あるを見ん。

三　著者の境界觀

著者法王は、我また何の法の王たるかを知らずと雖ども、想ふに是れ我見法の王な

るべし。意識宗認識教の法王なるべし。全く素人なりや、果た修行の經驗あるものなりや、と問ふ人あり。具象的に云へば全くの素人に非ざるべし。多小入室參禪されし人であることは其の書を見れば明了である。先づ少くも五六年間叢林生活を爲した人なるべく、恐らくは十ケ年前後を要せられしことゝ思ふ。然らざれば最初の氣分の變化（法王の說に依り）より乃至言詮――五位十重禁等に至るまで數百の公案を一一入室呈解する暇がない筈である。然らば見性の人なりやと云ふに、斷じて見性底の人に非ずと信ずる。然らば相似底の境界ありやと云ふに、相似禪と云ふも淺深無量ではあるが、恐らくは相似禪をも會して居られぬ人なるべし。

人或は云はん。僧堂に十年前後も居り、公案の調べも一通り濟みしものを、何とて相似禪をも會せずと云ふやと。答へて曰く、凡そ相似禪なりと云ふことは、師家の手前で云ふのである。學人の手前では全く斯く信じ切つて本來手中の那一事なりと諦信して、呈解するものならざるべからず。御當人（學人）分上に於ては相似か漸悟か頓悟か其樣ことの分るものでない。實に那一實なりと徹信現前底の時に呈解するのである。然らざれば生命が何處にある、禪機が何處にありますか。

信は是れ其の人の生命である、法である、道である。生命なき死伎は一種の遊戯と云ひ哲學と云ふのだ。信の生命ある處に玆に宗旨があり道があり、自己があるのである。師家是れを點檢して頓悟とし、見性とし、未在相似と見破爲人するのである。然るに法王自ら遊戯と知り、眞に非ずと思ひつゝ參ずる所には斷じて相禪も未だ會して居らぬのである。然れば天台の六即の語を借りて云はゞ名字即と相似即の中間なる觀行即程の境界ありやと云ふに、氣の毒ながら否なりと答へざるを得んのである。所謂一種の形を覺えたのが、本物の形に似て居るから、相似禪と云ふのだと思ふことを斷じて許さぬ。

そも〳〵相似とは形の論ではない、眞實了々の見性にはあらざるも、師家から見て相似に法性現前する時を云ふのである、氣分を思ひ遊戯と思ふ位では、全く外凡位の

素凡夫である。名字即にも至つて居るまいと信ずるのである。名字即とは兎糞的に種々の教理を單に知つて居る位をのみ云ふのでは斷じてない。教理を聞いて其の圓頓の教理を理解し、更に信受する位を名字即の處とするのである。法王未だ入室して其の解を身を以て呈し、口を以て呈するに至つて、其の呈解の法式すら信じて呈して居らぬ樣である。然れば御氣の毒ながら、名字即すら成就して居らぬ。況んや觀行即をや、況や相似即をやである。

要するに、變態心理的一種の氣分を標準に、遊戯的に相似禪者の室をサッサと過ぎ去つたのであると信ずる。或は全く坐禪もせず、入室もせずして、他の名字即程度の參禪者が相似禪者の室を素通りしたる、その日記帳を一覽して書いたのではあるまいかとも疑はるゝ節なしとせず、予の知人にも斯る日記帳を盜寫して虎の子の如く秘在しつゝ且つ其の形式禪(相似と云ふの價値なし)を笑つて居る利口者があることを知つて居る。何を以てか法王を疑ふこと斯くの如く甚だしきや。曰く現代濟下の宗師と云はるゝものにも、活版刷的に、相似に觀行に、名字已下の不信邪知の外道にても、御カマイなくどし〳〵公案を許す人師あることは事實にして、法の爲全く憤慨すべき道理はあれども、法王は只臨濟澤水等の老を尊信するてふ一着のみありて、法王自らの立脚地が一向ない樣である。例へば室内の一機一境を、絶對に否認して笑つて居るのが其の第一の證である。

亦變態心理(一種の)的一種の氣分を以て、室内を謾過することを知つて、未だ見性の何物たるかの見識一向不明了ではないか。見よ天地撲落乾坤第一人の時節到來せば法王の羅列した無字隻手の呈解法に何の不足がある何の不可かある。釋尊文殊出で來つて、無字の見所を呈することも、好い方面から見ればあれでよいではないか、若し好くない方面から見れば何と呈しても許さぬ。未だ室に入り來らざるに既に三十棒の分ありだ。

四　功罪兩途あり

此著書は前來屢々云ふ通り、今や洞上には文字禪のみ無事禪のみあり、眞實に徹證の人も殆どなく、濟下には白隱の力能く一時眞風挽回せりと雖ども、教家なれば知らず殺活時に臨むの活手段ある禪門でありながら、白隱一時の禪風挽回策に用ゐた、見性拶所機關法身言詮難透五位十重禁末後の牢關等の凡千の組織的手段を誰も彼も墨守して追々形式的に流れて生命を忘却し、相似更に淺相似となり、形の覺へ置きとなり了らむとする時に當つて、內外玲瓏赤裸々に形式佛法墨守佛法の窟籠を打開して、そこに住着を許さぬ樣になさしめんとしたる、其の功績や實に偉大なりと云ふべし。

濟下有道の諸禪德諸師よ、今や濟下の病弊を救ひ嶄新虛明の佛正法を挽回せんと欲すれば、洞山無二の知己を以つて任ぜらるゝ道元禪師が、洞山の用ゐたる五位を絕對に捨てた如く、白隱所立の組織的公案及書入を一炬に付し去つて、上中下根を擇ばず惡水を驀頭に注ぎグン〳〵只管打坐せしめて、時々捧頭に眼を具して殺活時に臨まれなば、冀くは再全の錦を見るに至らむかと思ふ。

法王或は未徹在にして妄情惡發して、此の評論を書きしものとするも、豈に是れ從上佛祖の深誡に非ずとせんや。佛法は絕對無我法なり、接化の手段は只時に隨ふべきのみ。法王の著此の一大動機を與ふるに多少の力あるものと信じて、其の功實に白隱の下に非ずと稱するのである。然れども禪僧も存外我見もあり、時勢を見る眼のないもので、守株是佛法と思ふて、中々活機輪を轉ぜぬものであるから、法王の一著に多少動かさるゝものも少なからさるべし。實はそれでは雲門の鐘聲七條の話も透れぬ解ではあるけれども、法は法、人情は人情で、中々舊窠を轉一轉できぬものである。

既に依然として動かぬものとすれば、相似觀行の禪も無論ないよりは好いのである既に此の禪もある方が尊いとすれば、彼の法王室內邊の大事を筆端を以て世に公にしたのは實に重大なる謗法罪である。況や淺相似禪すら得ざるものにして、白隱以下の老漢を惡罵して旁以て不信劣知邪知邪見の思想海中に沒在せるものに對して、下種益等の道緣を結ばしむる期を失はしめたる罪や計るべからず、見よ一句信聞の聞法

も立派に下種である。法華には一稱南無佛すら皆己成佛道と云ひ、總授記なりと謗すに非ずや、たとへ一時間一週間と雖ども無理會の所に向つて、無字隻手を拈提する其の功德の廣大無邊なること恐らくは法王にも分るまい。亦相似に參ずるものも斯るものを見ては、定力も慧力も一向進まないではないか。彼の數學に見るも式を書に依て見てから問題を考へては一向力が付かぬと一般である。隨つて此の書一度出でゝ、現に緣あつて相似に修行しつゝある人をも誤ること甚大である。隱すべきものを隱すのが慈悲大道である。此れ一寸方角が違へども赤裸々が果して道なれば、夏などは敢て衣服は不用である。大都京を眞裸で歩くべきか。孔子曰く、父は子の爲に隱し子は父の爲めに隱す、直き事其の內にありと。今や推さずとも倒れんとつゝある禪を內より推倒して快とする、是れを天魔波旬の道と云ふのである。法王、汝若し眞に嚴護法城の至誠あらば、斷じてかゝる不眞面目な作略に出でずして、親しく一方には其の宗の當路を說得し、一方には其の相似禪の宗師と稱するものを說破して、再行脚せしむるか、法席を休止せしむべしである。而して一方に自らも放身捨命的修行をするか、或は錯つて自ら法成就と思はゞドシ〳〵人を接して、第二の己れを作ることに骨折りさへすればよい。何ぞ自名すら隱して、世上盲目千人の前に暴露して犬の遠吠の如き態度に出るを要せんや。思ふに是法王は波旬の法王歟。要するに此の著は功もあるべく罪もあるべし。其の間自から功罪相半するものか、既に功罪相半すれば、畢竟無功に終るのである。

五　結評

熱血を注げる快著親切を極めたる言辭、方今新著界に、新禪書界に於ける優曇華の感あり、輕薄無責任一夜作を亂發する禪書界の一異彩である。法王恐らくは十年前後の蘊蓄を呈露せしものか。然れども只快なるのみ親切なるのみ、世道人心に何等の益する所あるを見ず。唯卷末に二三の法語を掲載したる所が貴いと思へる。其の外は玉石同架且つ秘在すべきものを暴露するに至つては、果して何の心行ぞ、況や其の呈解

なるもの杜撰粗漏の多さをや。而して其の遠吠的態度等を仔細に見來れば護法利人大道心より出でたるものとも思はれぬのである。願くくば惡發の我見妄情を倒一倒し來つて、上求下化の願輪に一鞭當てゝ見られよ。懺悔の熱涙滂汰たるものあらんか。現代果して禪なきか、法王の所謂る相似禪は未だ以て相似禪に非ず、名字即禪の最下なるものである。則ち一點の信なく兎糞的學解なればなり。名字即程度の禪即ち文字禪と云ふも通途には未だ單なる禪的學解を云ふとなれども、實は更に進んで信ずる處を云ふのである。さて方今未だ〳〵名字禪者もある。觀行禪者もある。相似禪者もある。漸悟の階級に居る禪僧も多少はある。或は頓悟成就の人も一人や二人はあると思ふ。依て信心發現して修行せんと欲すれば修行が出來る。請ふ可畏の修行者よ、斯る評論は斷じて讀む必要なさのみならず、讀むこと一片すれば害にこそなれ、得る所はないと信ずるのである。

一五、修行上の要心に就て

問　私は中學卒業後數年間獨坐しまして、今では坐るのが非常に愉快になりました。然し坐て居る間は何だか母の懷にでも抱かれて居るやうな、力强い感じが致しますが、坐から立つと手中の珠でも奪はれたやうな氣がして、如何しても落着くことが出來ませぬ。行住坐臥に安心の出來るやうになるには如何にすればよいでせうか、其の心得を御教示下さい。（府下。湖月生）

答　中學卒業後數ヶ年間獨坐せられたとのこと誠に感服の至りで、誰しも斯くあつて欲しい。殊に我門の僧侶は斯くなくてはならんのである。然し是れに對し尚不安の所があつて尋ねらるゝのは一層有り難く思ふのである。

一　正師に參ぜよ

思ふに道兄はまだ正師の室に入つて、修行上の安心と要路を御聞きにならぬと思ふ。凡そ坐禪辨道は敢て六ヶ敷い事ではないが、正師の室に入つて、時に修行の要路を聞かねば、十が八九は邪禪邪路に陷る。決して禪書を讀むだ丈けでは十人十種の初

中後の要心を識得することは出來ない。否な禪書を讀むで自分了見に解釋して坐禪するも、正法を邪解すること決して少くないのであるから、折角修行さるゝならば、然るべき師の室に入つて、參向しつゝお坐りになるのが宜しい。

修行者の學業上の經驗と、其の實行の過程とを直接に聞き、且つ其の間種々の御見識等を聞き取つた上で、當機々々の適當な修行法を示すべきである。が折角のお尋だから一往お答へする。

二　放身捨命の修行

一には坐中には愉快でも、坐を立てば其の落着がなくなるのは、要するに未だ定力が充分に具はらんからで、尙ほ精々に精彩を付けて熱心に坐りさへすれば、年一年と追々行住坐以上にも落着きが出來てくるのである。又たとへ一時間坐るにしても渾身の熱誠を振ひ起して坐らぬと何にもならん。ボンヤリ禪では定力を感得することが容易でない。

二には更に一歩進むで云へば只普通の定力が進むでも、八識田中に一刀を下し、識田打破して囮地一下の時節が來ねば、どうしても識浪情波に漂はさるゝが故に、徹底的の落着きは永久得らるゝものではない。依て同く貴重な光陰を使ふて坐るからには、一度は大放身捨命的の禪を實行するがよい。此の捨命的接心で廓然見性すれば、始めて衆生本來成佛なることを知る、この時始めて行も亦禪、坐も亦禪、語默動靜體安然の境界を得るのである。然れども此の大禪定を修行せんとせば、如何にしても相當の師に就いて指南を受けねばならぬのである。

一六、公案は超言思に體得せよ

問　六祖大師因に二僧ありて對論して曰く、幡動くなり、否風動くなり云々と議論せし際、是れ風動くに非ず、是れ幡動くに非ず、仁者の心動くなり、と示され申候。此の底意如何と質問され答辯に苦しみ申候。一般在家信徒に對して如何說明すべきか、御教へ下され度願上候。（福岡。凡僧九拜）

答　此の御尋ねは宗門向上の一着である。則ち佛向上の一大事であり、佛祖の境界上の法門である。然るに一般在家の信徒に分るやうに說明せよとは非道い。丸るで門外未知のものゝ問ひぶりだ。見玉へ尋常小學の一年生に對して、文學博士も尙も腦漿を絞る哲理が說明出來るか。夏虫何ぞ北極の嚴冬を知らんや。

道兄も全く此の公案は未徹底だらう。然れば知るを知るとし、知らざるを知らずと明白に云へば好いのです、而して禪僧として此の公案位が了々分明ならざれば、何を以て佛祖に見へん、何を以て社會に對せんと內慚外愧して、憤然一番正師に參見するが宜しい。どうも當今の宗學者たちが佛祖向上の妙道を以て、人天敎にも及ばぬやうな解釋して濟して居る。其れを聞いて公案とは斯るものぞと思ひ、誰にでも分るものであるかの如く誤解せしめたのである。道兄も恐らく斯る魔師に魔魅せられしより起つた御尋ねであらうから、起死回生的に苦言を呈するのである。

見よ釋尊の道力と德力と且つ辯才力を以てして、而も熱心火の如き佛弟子に對してすら、佛の本懷の一大事は機緣未熟なりとして、四十餘年間も御說きにならなかつたと、法華經に御自白があるのではないか。六祖の御答示は佛祖同一眼より看破つたる一大事である。何とて一般の俗耳に入らむや。但し在俗と雖ども、正師下に參徹せば得られると、共に、僧侶にして佛學ありとも、各々徹する所なければ終生此の消息を知ることは出來ぬのであるが、折角の御尋だから少し講釋をして氣息を通じて置く。

此の六祖風幡話は「不二是風動一不二是幡動一仁者心動」とあるが相手の二僧は涅槃宗の學僧で、法身向上の理窟は大分知つて居るけれども、未だ法身の樣子は夢にも知らぬ凡僧であるから、極めて手ぬるいお言葉の御答へであるが、六祖の眞精神は、仰山門下の妙信尼が曰ふた通り、實は「不是風動。不是幡動。不是心動」である。

風と幡と、心と、三物待對の見や、動と不動と二物相の病がある間は、此の公案は斷じて見へないので、動と不動と、幡と風と心と全く全一になればそこに明了々である。全一と云ふも、二三に對する一に非ず、一亦存するに非ず、畢竟如何、速道々々。

バタ〳〵。

いや、說き過ぎた佛祖の御呵嘖を被らんことを恐る。過つて佛祖も說かざる底の深義をも說明し了つた。聽き取れましたか。何所が是れ說き過ぎた所か、參究に吝ならざらんことを希ふ。至禱。

一七、眞悟か僞悟か

問　日露戰爭當時、さる有名な禪宗の御知識が戰場慰問に出掛け、陣中を歩いて居ると、頭上を彈丸が「ヒユー」と音を立てゝ通過したので、其の方が首を縮めて歩みを止められたので、案內の一將校が「貴師は寂然不動の修養を積める禪僧でありながら彈丸の音位恐いか」ときめ込むだら「予は法の爲めに身を惜む」と答へられたと云ふことです。答は當意即妙實に面白いが、其の昔東阜心越禪師が水戸公と會見した時の態度などと比較して、此の方の境界が疑はれてならないのです、悟後に於ても矢張り無畏は得られないものでせうか。一つ老師の御經驗を御披露下さい。（府下。湖月生）

答　無論悟道したとて直ちに無畏自在の態度を得らるゝものでない、小生の經驗でも其の通りであるし、敎理の上からでも其の通りである。所謂暴虎馮河の小勇や、化石的寂然不動の悟道の有無に拘らずあるものはあり、無いものはない。亦禪僧の修行は彼の將校の所謂寂然不動の修行ではない。佛法の寂而常照はその樣なものではない。

一　禪の目的は生死解脫にあり

何だか敎理を知らず禪機を知らぬものは、寂然不動と云ふは、一種の膽力養成の樣に思ふて居るやうだが禪の修行は、膽力養成ではない。精神的生死解脫であり、佛智見開發であり、自己の三昧にあるので、無論副產的には膽力養成にもなり、世の所謂寂然不動も得らるゝのであるけれども、悟れば直に絕對的に斯くなり得らるゝものではない。但し坐禪を本氣でやれば悟らずとも日一日と年一年と、其の傾向を增進することは、疑を容れんのである。

要するに膽力や不動を得るのは智見（悟道）の力は直接原因にあらずして、定力が直接の原因なのである。而して智見は時至れば廓然體得（大悟）せらるゝものである

が、定力は然らず、時々に勤めて打坐する所に於て、悟未悟に拘らず、漸々に增進するものである。斯に於て經には理は頓に證すと雖、事は頓に除くに非ずと云ひ、又頓悟漸修と云ふ所以である。敎家には是を見惑頓斷如破石、思惑漸斷如藉糸と云ふのである。

二　異中同辨の眼

而して心越禪師と其禪師の對照論は、斷じて取るべからず、又捨つべからずである。何故に取らぬかと云ふに、法は活版摺的に判斷することを許さぬからである。心越禪師と某禪將と定力と道力も同一の程度であるかないかも、此の實例丈けでは決して判斷することが出來ぬ。兩禪師同一力であつたとしても即處の化導法は一樣でないからである。兩禪師同一力でも山僧法の爲め身を惜むと喝道して其の將校に說法したかも知れん。亦更に向上より見來れば、此の時某禪師の此の態度頗る妙諦あることを見ゆるけれども、某と云ふ禪師（姓名不明）故、果して道眼圓明の人であるかなきかも明かならず、亦道兄に其の妙諦をお話しても力地一聲未發の人には呑み込めるものではない。

次に捨てずの方よりすれば、兩禪師の道力は兎に角、其の定力邊に於て非常に差があつたかとも思はれる。いや甚だしきに至つては、此の某禪師たるもの道力（悟）も未だ充分でなかつたかも知れん。今日の禪僧には餘程眉につば付けて見なければなりまする。決して肩書などは當てにならぬ。

要するに悟つたからとて憶病蟲が、直に逃去るものではない。且つ憶病蟲退治法は悟未悟よりも、定力をグン〳〵鍛錬するにあるのであるから、同中異辨の眼を具して定力と智見と雜炊にしてはならぬ。兎角この雜炊眼を以て佛法を見ることが多いので困るのである。

一八、理想禪と實際禪

が、定力は然らず、時々に勤めて打坐する所に於て、悟未悟に拘らず、漸々に增進するものである。斯に於て經には理は頓に證すと雖、事は頓に除くに非ずと云ひ、又頓悟漸修と云ふ所以である。敎家には是を見惑頓斷如破石、思惑漸斷如藉糸と云ふのである。

二　異中同辨の眼

而して心越禪師と其禪師の對照論は、斷じて取るべからず、又捨つべからずである。何故に取らぬかと云ふに、法は活版摺的に判斷することを許さぬからである。心越禪師と某禪將と定力と道力も同一の程度であるかないかも、此の實例丈けでは決して判斷することが出來ぬ。兩禪師同一力であつたとしても即處の化導法は一樣でないからである。兩禪師同一力でも山僧法の爲め身を惜むと喝道して其の將校に說法したかも知れん。亦更に向上より見來れば、此の時某禪師の此の態度頗る妙諦あることを見ゆるけれども、某と云ふ禪師(姓名不明)故、果して道眼圓明の人であるかなきかも明かならず、亦道兄に其の妙諦をお話しても力地一聲未發の人には呑み込めるものではない。

次に捨てずの方よりすれば、兩禪師の道力は兎に角、其の定力邊に於て非常に差があつたかとも思はれる。いや甚だしきに至つては、此の某禪師たるもの道力(悟)も未だ充分でなかつたかも知れん。今日の禪僧には餘程眉につば付けて見なければならぬすまい。決して肩書などは當てにならぬ。

要するに悟つたからとて憶病蟲が、直に逃去るものではない。且つ憶病蟲退治法は悟未悟よりも、定力をグン〳〵鍛錬するにあるのであるから、同中異辨の眼を具して定力と智見と雜炊にしてはならぬ。兎角この雜炊眼を以て佛法を見ることが多いので困るのである。

一八、理想禪と實際禪

問　禪は極めて高尚幽玄にして沒把鼻なるか如し、果して沒把鼻の法なれば、到底企て及ぶ所にあらず、若し企て及ぶ所に非ずとせば世道人心に何の益があらむや。此の邊甚だ不明なり。願くは切に御明解を乞ふ。

（北越。煩惱居士）

答　禪は決して高尚なるものにもあらず、又卑近なるものでもない。故に能く卑近にも至り高尚にも至るのである。此の消息が不明であるから沒把鼻なり、鯰瓢的なりと思ふのであらうが、此の邊の消息を靜かに工夫一番してもらいたい。例へば一箇の石あり、此の石は高尚にはあらず又卑賤にもあらざるが故に、よく高尚なる佛も作れるし、能く卑賤なる動物も作り出すことが出來るのである。是を沒把鼻なり高玄なりとして企て及ばぬとせば、一切の現象界は皆高尚なり又沒把鼻なりとせねばならむ。

然れども何人も何等かの職業に從事して落付いて居るではないが、誰も企て及ばぬとしてボンヤリして居るものはない。禪も亦是の如しである、否な禪とは自己である、宇宙であるから、一人も企て及ばぬと云ふべきものでない。只個々の眞實相眞實體に落付くまでのことである。決して沒把鼻でない、實は餘り分明すぎて却て見損ふのであらふと思ふ。

上來は禪の法體を述べたのであるが、已下禪の修養上にも禪は高尚卑近にあらざるが故に能く高尚に、能く卑近なることを述べて見ようと思ふ。

一　向上非佛の禪（理想禪）

正傳の禪は悟るためでもなければ、靈妙奇特の境界を得る爲めでもない、果報を得んが爲めでもなければ、名譽や利益の爲に修するのでもない。但だ佛法が佛法の爲めに佛法を修するにある（學道用心集）のであるぞと永平開山が御示しになつてある。是れを向上非佛の禪と云ふのである。

此の立場から見來れば一切有所得心の修行は皆正傳の大禪とは云はれぬのである。此の一切を期待する所なき禪が、佛祖の大定にして實に理想的清淨禪と云ふものである。若し正信の大機ありて、此の禪定に入れば悟未悟に關らず、直に是れ佛祖と同道

唱和の人であるから、初心の辨道も直に佛境界なりとするに足るのである。此の禪定に入る所に大悟大徹の時節もあるのである。

此の赤裸々脱落の大修行は清淨離塵の大禪定であるから、何だか高尚幽遠にして凡人の企て及ばぬことの如くに見える人もあるそうですが、それは實に間違ひの甚だしきものである。一切の期待も理性の判斷も不用であるのであるから何の面倒かあらん。ガラリと手打ち拂つて、拂ひ除けた箒をも捨てゝ兀然端坐するに、何の不能かあらん。餘りの安すさに却つ氣が付かぬのであらうと思ふ。然るに此の禪はあまり高尚すぎて入り易からずとし、初心の修行には適せぬかの如く邪思惟するものが有ると聞くが、誠に思はざるの甚だしいものであるが致し方がない。

二　實際禪

然れども機類萬差なれば、學人誘導にもまた千差萬別の手段があつて修行せしめねばならぬのである。茲に於てか佛祖は建化門頭千變萬化の善巧方便ありて、衆機を接得せらるゝのである。此の實際方面から見來れば何の目的からでもよいから、修行せよと云ふので、健康の爲めでもよい、性癖を矯す爲めでもよい、膽力養成の爲めでも記憶養成の爲めでもよい。人格鍛錬のためでも腦病退治のためでもよい、靈驗を得んためでもよい、果報を得むがためでもよい、名利のためでも惡からず、見性悟道のためでも不可ではない。

故に承陽大師の正法眼藏禮拜得髓卷に、有心にても無心にても道を求めよと示されてある。甚だしきに至つては萬古の摸範として示されたる、永平大清規の中、知事清規の最初に、如來が從弟難陀尊者を出家せしめたる因緣を長々と引いてある。其の内容の骨子は斯うである。如來が難陀を發心出家修業させやうと思ふけれども、難陀は未だ結婚したばかりであるから、其の新婦戀しさに如何にしても發心修行が出來ない。依つて如來方便に天女を見せて佛道修業すれば、來生その天女の夫となることを得ると示された。難陀こゝに心動き來生天女の夫となるべく、茲に初めて發心修行するや

うになつた。

これ動機甚だ卑俗なりと雖、其の目的の下に發心せしめて修行するやうにせしむるのである。斯る卑俗な目的を達する爲めに發心行道することをすら、如來は御聽許ましましたのである。然るに世の依文解義の漢は、實際的方面には斯る慈悲落草の手段すら入用であることを忘れて、只理想的無住想の坐禪で無なければ、邪禪があるかの如く思惟して、單に無暗に高尚にさへ徒らに高唱すれば好いやうに思ふのは未だ以て佛祖の妙道を知らざるの致す所である。

また開山は屢々蓮華色比丘尼の因緣を引き、破戒作惡の業に依り一時は地獄に落ちてもよいから出家せよと勸導せられ、比丘尼の善巧誘引を龍樹大士と共に御推示せらるゝ高懷を拜せねばならぬのである。依つて難陀尊者も天女と結婚する目的を達せんために、出家修道するや、發心の動機は甚だ卑野であるが、其の修道力に依り多少道根强大となるや、佛世尊は時至れりと思召し、更に難陀に示すに愛欲を全ふする目的の下に修行すれば、其の修行力に依つて一時上天の女と婚することを得るも、其の果盡き了れば大地獄に入るべきを具體的に示された。

難陀此所に至つて、道根の力もあつて、新婦の愛着にも引かれず、天上の夢樂にも捕はれず、初めて解脫の爲めに修行して大阿羅漢果を證得したとの、大寶積經胎藏品の因緣を、大清規の知事清規に引いて、有想執着の法を誡め、無住相の法を示し玉ふたのであるが、兎に角萬機に接するには種々入道せしむるの手段あることを知ることが出來るではないか。依て理想的には一切超脫の禪でなければならぬけれども、實際的には各人各種の目的の下に坐禪することを妨げんのである。

身心鍛錬の爲めにも坐禪すべく、大臣になる爲めにも坐禪すべく、教育家になるにも良軍人になるにも坐禪すべく、豆腐屋になるにも下駄屋になるにも坐禪すべく、主人になるにも下男になるにも、車夫馬丁になるにも坐禪せよ、名利のため靈驗のため果報を得んため坐禪するも功德廣大である。或は神通妙用を得んためにも耶教神道儒

者學者になるにも、坐禪すれば甚だよいのである。如來は美人と結婚するにも坐禪せよと示し、蓮華比丘尼は墮獄してもよい出家修行せよと告げ、開山は是れ等の因緣を引いて御親訓せらるゝのではないか。徒らに理想禪をのみ說く事を知つて實際禪を忘却するから臨濟曹洞共に禪風地に落つるのである。

三　萬種の誘引法

要するに、人間は活物にして死物に非ずとせば、如何に高尙なる禪なりと雖ども活版刷的固着禪は何の要をか爲すに堪へんやである。理想は高遠なる無相三昧の大定に入らしむるにありとするも、實際人類の要求することは、必ず初めより其の理想鄕を願望し難きものであるから、十人十種の目的を達すべき基いとして修行するもよい、然れば其の十種の目的も達しつゝ、竟には理想の大禪定にも趣向すべく、心機發動し來るものなることを示すにあるのである。

こゝが佛一代祖一生、萬機を接して、竟に一味の大涅槃界に直入せしめたまふに、千變萬化のある所以である。然るに理想禪の尊きことを知つて、徒らに高尙なる言敎に擒はれ、實際萬種の誘引法を忘却し蔑視して、萬機を接することを知らず、禪は唯向上の鐵漢のみの修する道であるとして、自らも恐れて修せず、他をも忌んで誘接すべからずとするの弊に陷るか、然らざるものは實際の手段禪にのみ擒はれて、健全になれば禪の目的を達せり。煩惱なければそれが禪である。イヤ禪なきも軍人たり、敎師たり、商人たり、何の不足かあらむなどゝ、無事の窠窟裡を以て足れりとする者がある。理想に偏するも實際に偏するも、何れも正適の眞道でなく、邪路の小徑に落在せりと云ふべきである。

十九、悟りに差別ありや否や

問　傳光錄を拜覽するに著者常濟大師は、祖師により大悟、契悟、感悟、契會、深悟、信悟、開悟、自悟等の文字を區別して用ゐられたるが如く推せられ候。是れ悟の程度を示せるものに候や。（朝鮮。迷惑生）

一九、悟りに差別ありや否や

答　全く斯る差別はない。列祖の開悟を曰ふに種々の閑名目はあるが、唯その開悟を云ふ文字の「アヤ」に過ぎぬので、内容の深淺等に依つて熟字を換へたのでは斷じてない。だが往々熟字の如何に依つて所悟の淺深を示されたるかの如く云ふものあるが、全く取るに足らぬ愚推である。但し如何に列祖と雖も修行時中には初心にはある程度の悟りを證し、後竟に徹底大悟せらるゝのが多いのである。

彼の南泉、趙州や雪峯の如きは、大悟十八度であつたと云ふて居る。斯くの如く、人に依つて一度兩度の後眞個徹底せらるゝものであるが、乍併、所悟の程度に依つて悟道の名稱を定めて付することは佛祖門下には決してない。況や傳光錄の所說の如きは、其の多くは最終嗣續前の大悟徹底であるので、淺深の別のあらう筈がないのである。

二〇、機根と禪心の關係

問　悟つても愚者は愚、鈍者は鈍なりと云ふ事を屢々聞き及び候が、一度大悟徹底せる者は佛知見を開くものと信じをり候。隨つて愚者鈍者には悟なるもの無かるべく、あるとしても其は理論上の事にて、丁度草木國土悉皆成佛などゝ云ふと同一と思はれ候が、如何なるものに御座候や、高敎を仰ぎ度く候。

（新潟縣。山田生）

答　此の問意に答へるには相對、絕對、圓融の三方面に分類してお答へをせねば判然明瞭せざる事と思ふ。

一　那伽大定の見解

智愚賢不肖、老若男女、柳綠花紅、山高水長ある事は、相對界中の實相で大悟徹底しまいが、しやうが決して變りはない、同じことである。若し此の實相が變るやうな悟りでありとすれば其は所謂薰錬觀習の禪で、未だ以て佛祖堂奥の那伽大定では斷じてない。

而して大悟徹底とは佛智見開發の事であるのは御說の通り。その佛智見とは什麼物ぞ、佛にあつても增さず吾人にあつても減ぜず圓同大虛無欠無餘の那一物である。敎

家は是を眞如と云ひ法性と云ひ、實相と云ひ、又佛性と云ひ、一心等と云ふもの、家裡には正法眼藏涅槃妙心と云ひ、本來の面目と云ひ又柱杖拂子、蒲團、禪版等と喚び來つて居る。

這箇は是れ獼猴も持し西施も持し、賢者も多からず愚者も少からず。人々個々圓具底のものである。此の故に如來は、一切衆生皆如來の智慧德相を具せりとし、又衆生本來成佛と宣はれた。是を平等大慧と云ふのである。

二　相對界の事

而して相對界の事は賢不肖によりて修行するも、其の能力如何によつて其の功果の上に遲速あるのみならず、更に可能不可能の事さへあるが、絶對平等界の修行は人々圓成底の事故賢愚を論ぜず、唯純信決定して、師示のまに〳〵修業さへすれば此の平等大慧に大悟徹底することの出來ぬものは一人も半人もないのである。而して同じ悟りでも賢者の悟りは深遠にして愚者の徹底は淺近なりと云ふ事は斷々乎としてない。

皆同一平等大慧の佛境界に投入する事を得るのである。

若し賢愚同一法性界に投入出來ぬとすれば圓同大虛ではない、無欠無餘でもない、又百草頭上無邊の春色とは云はれぬ。

お尋の愚者の悟とは理論上の草木國土悉皆成佛ではないか云々との御懸念は斷じて不用である。右理論上の皆成佛は斷じて悟りではない、思想である。思慮分別である。依て此の理論上の皆成佛は愚者にはなくて、却て智者學者にある病である。依て相對界より見れば縱令大悟大徹しても智愚男女に一點の異動もない。否半點も異動するが如き悟なら眞の悟ではない。

三　絶對界より

然るに絶對界より見れば悟らざるも（本分事の邊）智愚賢不肖其の儘法身の大毘盧遮那如來であると共に、大悟大徹（兒孫邊の大事）すれば智愚賢不肖其の儘に等同一如の活佛境界に即入する、即ち其の眞境界を明了々〳〵に識得し體得することを得るのぢや。

かるが故に悟つたからとて訥辯の人が快辯になるでもなく、經綸の才なき者が經綸の大才になるでもなく、記憶力の少きものが博識强記の人になるのでもない。相對的には依然として愚者は愚であるが、徹底せる大自覺者、大安心者となり得るから法性海中任運堂々として大手を振つて濶歩する人になるのである。

四　圓融なるもの

次に圓融である。既に絶對よりは大悟大徹すれば個々圓成佛を體得するが相對界より見れば依然として智者は智者、愚者は愚者なりと一決せねばならんが、一切世間の罪惡や不安や懊惱は皆無明迷執より起るに外ならぬを知れば、一明無明の根原を覺破し、本來の主人公なる萬德圓滿なる清淨法身を體得すれば、自ら心境如々に稱ふから胸中穩健雄大になり自然と宗教的に、道德的に、人格も變り行くと同時に、心中餘裕ありて世の實相を鑑識する力も增進するから世務を營む上に於ても、自ら與奪自在の妙手を得るに至ることも決して疑ふ可らざる事である。（然し是れは他に仔細ある事で一朝一夕に現前するものではない）要するに、相絶を分つと雖も、元來相絶不二一體圓融のものであるから、大悟徹底すれば相對の方面から見るも、大いに追々と人格の向上すること勿論である。

さればと云ふて、悟たら直ちに愚者が忽ち種々の才能を發揮し、所謂賢者となるものではない。但し所謂賢者にならずとも、愚者の大悟も賢者の大徹も、賢愚によりて一點の差を生ずるものでは斷じて無い。

二一、悟道と學解の差別

問　教相を學び經論を尋ね、其の他思想上の問題に逢著して參禪して達した人の悟と、さう云ふ事に沒頭せずに、初めから唯如法に辨道して得た悟とは、其の內容は同が別か、又何れが下化衆生に効力大なるか、又何れが大悟界に達することが早いか、と云ふ質問を受けて困つて居ります。何卒私の心情を御諒察の上御教示被下樣願上ます。（福岡縣鞍手郡。三好生）

答　御尋ねの問題は極めて平凡の問題に似ては居れども、人に依つては實に難解の問

題であると見えて、此の種の疑惑裡に彷徨して居る人が中々多い。中には邪路に入り了つて平氣で居る人が澤山あるのですから、此の問題を解釋し置くことは修行者の爲に實に大切なる事である。而して此の御尋ねに二義あり、一には學問の有無に依つて證道の內容に淺深廣狹等の差ありやなしや、二には證道の上更に學問の有無に依つて化導に便不便ありやなしやの御尋ねであるやうである。依つて左に此の二問題に付いて御答へすることゝ致します。

一　學問の有無は證道の內容に差別を生ずるや

此の問題は唯一言否とお答へするまでゝある。更に序に學問の有無は悟道に遲速を生ずるや否やと申すにも、唯一言否なりと申せばよいのである。右の二問共に一言否なりで好い理由は、悟道及悟道の內容は、思想の學問及び其の學問の知識とは、全く沒交渉であるからである。絕對に無關係のものであるからである。

見よ、釋尊の如き大學者にして證道に十二年を要し、阿難の聰明强記にして得道に四十年を要し、香嚴、臨濟永平の如き學德深高にして共に十有餘年を要し居らるゝに拘らず如來在世の廣額屠兒や修利盤特支那に至つては六祖大師や玄沙大師、最近日本にては八幡の伽山老漢の如きは何れも可憐無學文盲の漢なれども、一年五年二十年の間に何れも立派に超佛越祖の活眼睛を御開きになつて居るのではないか。然るに方今は洞濟兩宗の僧俗に學問の智識は道を成するの必須條件として、先づ學問せねばならん事のやうに思ふて居るものが大分見受けられる、甚だしきに至つては修行時中に於て諸種の思想と比較研究せねばならんかの如く考へて居る妄想家もある。實に是れ何たる糠妄想であらふ。だが彼の無意味に等しき遊戲的公案を只やたらに敎へて居るのとは、或は增しかも知れん。彼れは皆或る妙觀察智の修行をハキ違へた病である。

上來の精神能く明了致した上に於て亦一分沒交渉中に交渉あり、無關係中に關係あることも知らねばならん。其の有交渉とは悟道の內容には無論沒交渉なれども、其の證道に遲速あらしめたり、又邪路に入らしめたり、或は邪路に入ることを防禦したり

する點なるものである。さて其の遲速あらしむるとは、思想上の智識は修行上何等の必要もなく、參考にもならざることを師家より聞くも、習慣性と云ふものは恐るべきもので、何んとしても舊知識を手打ち拂つて、唯師家の敎方のまに〳〵修行することが中々できぬ人もあつて、宗乘餘乘等の知識を參考にして修行せんとする妄想がチヨコ〳〵出て來るものである。其が爲めに修行の最初より精神に眞裸になつて修行する人よりも、得道明心することが遲くなる道理もある。或は人に依つては宗餘乘の知識は只知識である。道その物とは何等關係なきことを、研究の結果知ると共に、清淨法身の重きことを聞き、煩惱妄想の其の日暮しの不滿足に氣付き、層一層奮起一番して速かに如來寶明の空海に入らむと欲する願欲心憤起するがゆゑに、錯りなき宗餘乘の知識あるものは、成道速かなりと云ふ理由もある。

此の故に佛祖は人をして敎を說き敎理を知らしむるのであると共に、學研にのみ沒頭することを深く誡め玉ふのである。況や其の學究なるものは、たとへ宗餘乘と雖も凡僧より聞けば佛意に契はぬ解釋多くして、無事甲裡の盲目禪其の儘悟りの毒坑に陷れることのみ多き今日に於てをやである。又況や凡僧の講師にも付かず、自分勝手に獨習的に宗餘乘を亂讀して、勝手次第の解釋を下して居る連中に佛祖意を會して居るものは半人もなしだ。次に邪路に入るを防禦ぐとは、天台の六即でも眞言の十住心でも洞山の正偏功薫の五位等でも明快に知れば、斷常の二見に墮せず惡平等惡差別に陷らず、因緣法爾の理を知つて無禪の長者子となつて、能く修行すべきことを信ずるに至るものであるからである。故に古來佛祖は修行の最要の心得として、或從知識或從經卷と示さるゝのである。

然れども修行直接の最要は唯々正師家に參ずるにあるのみ、而して正師の指示の通り絕對に信順して、其の指示のまに〳〵修行さへすればそれで好いのだ。其の內に自ら活經卷も十二分に具備して居るのである、要は修行者は素要として宗餘乘や諸種の哲學等を知り置く必要は直接には秋毫もないのであるが、然れども間接には右思想上

の學も參考にもなり又害毒にもなると云ふ關係もあるのである。

二　學問の有無に依り化導上便不便の別ありや

此の方面には二意あつて、其の一は最上乘の人を接するには學問更になくとも、何等不便はなけれど、其の二は中下の人を化導するには、學問のある程便利である。此の點からは曾に宗餘乘のみではない。東西古今の一切の哲學科學は申すに及ばず、一切の宗教の事も藝術のことも商法戰爭魚賣り、飯炊ぎすることも掃除することも、お茶の入れ様物の言ひ様に至るまで、何一つとして知る必要のないものはないのである。知れば知る程善巧方便の自在あつて、餘さず漏さず接得することを得るのであります。以下限りなき意御推讀下されたし。

實に此問題は平々凡々に似て、實は此の問題を知れる人は少いのである。誠に支那に達磨、我が國に永平出現されるまでには、盛んに教相世に出でたるも、この兩聖出現するや、一切の言教を捨てたる的旨も、此の問題上に於て解決せねばならん大問題である。方今の人は此の問題を誤つて解して居るものが大多數である。御注意くだされたし。

二二、佛法禪と外道禪

問　古來外道禪と稱せられる瑜伽で說く解脫の境界に達した人は、心の動搖なく、善惡等の働きを止め無明もなく又外境の爲に左右せらるゝ事もなく、心平靜である。然し寒灰枯木の如くなるのではなく、大死一番して一切衆生のために慈悲の雨を降らすのであると。して見れば我が宗の解脫底の那人の境界と變りがない様に思はれますが如何のものでせうか。（東京。研究居士）

答　小衲はお恥しいことですが、印度宗教學や、比較宗教學は未だ研究して居りません。隨つて印度の六派哲學も一向知らないのです。且つ此欄には直接我が門風の事に對して、御疑ひのある人に解答するのが目的であるから、居士のお尋に對してはお答する必要ないのですけれども、折角のお尋ねを無下に捨てるのも濟まぬと存じ、聊かお答致すことゝする。

一　兩禪の共通點

與へて云へば瑜伽派は六派中の一つであると共に、實は印度宗教哲學の通有性的のものであるのださうで、一派として獨立すべき程の特長を有せざるものであるとのことである。ことにその哲學宗教實踐の三方面共に、數論派と大差なしと雖も、哲學宗教の二方面よりも、其の實踐躬行の幾多の三昧を修して、解脫を得ることに重きを置けるものゝ如し。而して其の實踐三昧の力能く所謂の解脫を得て、身心湛寂の境に住して物我の二境を離れ、慈心を起して衆生を引導すると云ふ點に至つては我が大小乘の佛教とも大差なきが如し。猶ほ他の五派は宗教等とも大差なかるべし。更に基教や儒教とも甚だ似かよへるものと云ふべし。何となれば是は此れ人々本心の聲にして深淺こそあれ、多少なりとも本德を錬磨せる一切の賢聖たる各教の宗匠たちの、自然に直感せらるゝ所であつて、佛教より見るも則ち是れ本來具有一分本德の聲なればなり。然れば彼れ瑜伽の說くと云ふ（一居士の言に依つて）解脫、平靜、慈悲、救濟等の如き一往は立派に佛教の教理にも稱ひ、且つ我が宗門に於ける枯木龍吟底の那人の活機用とも相似て一致するのである。是を小生は屢々同點と云ひ共通點と云ふのである。

二　兩禪の根本差異

凡そ何物にも同異の兩點あり、共不共の別旨あることを知らざる可らず、依て同共點より見れば實に幾多の淺深賢聖も其の揆一なりと云ふを得べけれども、奪つて此れを評せんか、彼が根本思想たる哲學に神我を認め甚だしきに至つては人格的神を認むるに非ずや、我が佛教の無我神論則ち人法二空の根本哲理と水火相容れぬのである。其の根本に於て既に正邪路を殊にす。其の淺深の如き論ずるに足らざるなり。

儒教は一種の天を認め、基教は頑石的靈魂を認め、亦彼は個體的神を認む、彼の六派哲學に何れも一種の大我を認む、然らざるものは斷無の頑空に墮す。予聞く原始佛教時代に於て佛教と外道とを分別する標準は、無常、無我、涅槃の三法印と四種の因果論を以て內外兩道の正邪を判定したのであるとのことである。三法印なければ常見

の邪道に墮し、四種の因果の內の正因正果の法なければ、斷見の惡趣に墮つ。而して三法印と正因果に契當する敎は外道には一つもなかつた。現在も然りである、耶蘇や儒敎は云はずもがなであるが、現代の月進日歩の科學でも未だ哲學でも此の兩者が具はらないのである。しかし流石は學問である、大分三法印的の眞理を認める樣になつて來たけれども、未だ正因果の法には一向明かでない。而して此の三法印と正因果の圓融一體觀に入つて始めて佛敎の小乘敎の門に入ることを得るのである。

誠なる哉、佛在世に於て、九十五派の哲學宗敎家は皆佛弟子に論破せられて、佛海に歸投したのは皆これが爲である。現代も亦々是の眼を具して、一切の學敎等の未だ以て佛敎に到底及ばぬ所を見屆けねばなりません。居士よ瑜伽の哲理も宗敎も實踐も未だ我が小乘の門にすら入ること能はざる淺劣邪曲の小徑である。彼の道に入つて熱心に實踐躬行したなれば、人天の福報と、有漏の禪定とを得らるべしと雖も、決して佛界無漏の福惠を體得せらるゝものではないのです。何を以てか我が脫落現前の那人と同一視することを得んやである。

三　玉石を混合する勿れ

どうも今日の人の弊は淺劣なる其の共通點あることをのみ知つて、其の特殊不共の甚深般若あることを知らざるものゝ多きには實に困ります。見ずや六十二見は我を以て本となすとは敎相家も明に云ふ所にして、亦我が祖師の懇ろに誡め玉ふ所に非ずや。神や神我を認むる敎、何を以てか眞の大解脫を得んや、何を以てか眞の身心湛靜を得んや、亦何を以てか眞の大慈悲心を成就せんや、絕對大無我の敎に依つて、絕對大無我の修行してこそ、こゝに大解脫門が開くのである。大死一番する事を得るのであり、無緣の大悲を成就するのであります。

さて現代的研究法に依れる宗敎學も必要ではあるけれども、それと同時に着實なる敎相學の御研究が大切であります。着實なる敎相の研究をすれば、惡平等論的共通點にのみ捕へらるゝ病根を一掃することが出來やうと思ひます。佛弟子は須らく佛眼

を開いて、言葉の相似たるを以て、玉石を混合せないやうに、注意せんければなりません。

二三、滅却心頭火自涼

問　私は屢々快川和尚の「安禪不必須山水滅却心頭火自涼」なる御法話を聞きましたが誰方から聞いても一向徹底致しません。此の話を善意に解すればよし、若し惡人あつて殺人强盜あらゆる罪惡を犯して死刑或は獄に投ぜらるゝとも「滅却心頭火自涼」何そ恐るゝに足らんやと誤解せば、飛むでもない間違を招きはしますまいか、此の邊の事は如何なるものでせうか。（名古屋。疑惑生）

答　絶世の老禪將快川國師の鍊りに鍊り、鍛へに鍛へ上げた妙境界から獅子吼した那裡の消息を、素凡夫の老媼老爺たらしの說敎演說に應用されれは困る。

況や其の說敎者と雖も快川の境界は夢にもまだ知らぬに於ては、誤解に誤解を重ねて飛むでもない誹謗正法の大罪を犯すに至るは燎乎として火を視るよりも明かである。

蹟つて貴君の疑惑を起さるゝも無理からぬことではあるが、貴君のお疑の程度を察するに、禪理の御研參は未だ眞に初心らしい樣であるから、這般の端的を眞面目にお答へしても分明せまいが、大概の所をお話しする。

一　安禪の二字が眼目也

佛法の敎理は至て廣大であるから、一朝一夕にお話は出來ぬが大別すれば、

有漏　相對……二元的（下）　不二（上）

無漏　絶對……一元的（中）

になるが貴君の疑所は其下に當る有漏的の妄想の上に起つた疑問である。而して快川國師の獅子吼は其の不二的の境界を掌握した上の消息です。猛夏何ぞ嚴冬を知らむやで、本より相對的の立場の人を敎化するに斯る因緣を引くのが實は大なる誤りである。

此の安禪云々の語を見るのに、只火も自ら涼しと云ふ所ばかり氣を付けて、安禪の二字を見落しては全く不可なのである。殺人や盜を爲す極惡人に安禪はない。イヤ五戒十善を持つ善人と雖も未だ以て安禪は斷じて無い旣に禪に安ぜざる人なれば火は

必ず熱かるべく水は必ず冷である。況や見惑思惑から作り上げた此の世界は觸目對面悉く衆苦に充滿してをる。善因善果惡因惡果は自然の眞理だから、其の業のまに〳〵地獄も感得し、極樂も現前するのである。

二　火自凉の端的

然れども惡を離れ善を超越し、更に聲聞界にも菩薩界にも佛界にも足も止めぬ。絶對一道不可得の最上乘禪に安住せらるゝ快川であるから、觸目對面自己の遊戯三昧境ならざるはない。善惡を超へ苦樂を超へた那人ですから火も熱からず、水も冷かならざる位の事は朝飯前のことぢや。大燈國師は

坐禪せば四條五條の橋の上
行きゝの人を深山木に見て

と云はれたではないか、亦彼の洞山大師の無寒暑の話に、僧の「寒暑到來如何か廻避せむ」、と問ふたら、洞山は「須く無寒暑の所に向つて去るべし」、と答へられたではないか。此の話頭が了々分明でなければ快川國師の獅子吼は決して分明しません。

先づ此の位で置く方が好い樣ぢやが、一寸國師の火自凉の端的を道破して見ようか、アーッ、である。國師のアーッ、と凡夫のアーッ、と是れ同か是れ別か、同と云ふも當らず、別と云ふも當らず。此處に實參實究を要する最大事があるのである。禪の命脈も此處にあるので婆々談義などに持ち出すべき安價な法門ではない。

二四、禪者の授記觀

問　未來を豫知するてふ點に於て佛敎の授記支那の周易、クリスト敎の豫言等は同じ性質の樣に思はれ申候、此の豫知てふ事は果して可能の事に候や、殊に禪僧としての解釋及これに對する態度御敎示下され度候。（出雲。大了九拜）

答　疑問の起りさうな問題である。隨つて答話の必要は十分ある。けれども大分面倒な說明をせなければ分るまいと思ふ。依つて要項を四段に分つて答へることゝ致します。

一　同中異辨の眼を具せよ

同中異辨の眼とは諸法は皆平等差別の義あるものである。隨つて周易と、基督教の豫言及び通佛教と禪の授記の四說にも平等の共通點より見れば同性質のものであるけれども、其の差別不共の點より見れば、其の深淺大小曲直實に同日の論ではないのであるから其の平等の同點と差別の異點あることを知つて、決して同性質なりと道ひきることは斷じて出來ないのである。兎角今日の思想の通弊は何事に依らず、其の同點を知つて、其の異點を忘却するのにあるのである。

換言すれば差別を忘れたる惡平等に陷るのである。餘程の思想家でも平等を偏重するのである。十中八九の質疑は皆此の平差同異、正偏回互圓轉せる活眞理を知らざる所より來れるものであると深く慨嘆するのである。須く同中異辨の眼を開いて見ねばならぬと云ふことを注意してをきます。

二　易學及基敎の豫言

小衲は未だ周易の事も、基督の事も、深く研究した事はないから、立派にお答へは出來ぬが、今日まで僅か聞き及むだ頭を透ふして看來れば、周易は太極無極の眞境に突入して、一握八卦萬象を判ずるのであるから、眞實その造詣深き人物の判合ならば、未來を豫知することは決して難事でない筈である。

基督の如き熱烈にして着實なる信仰を有する宗教家の頭は常恒に（奪つて云へば間歇的に）無我の大我（周易の太極無極に當る）の境にあるが故に、自他の未來を幾分豫知することが出來るのである。何となれば、眞理は一卽一切であり、自己卽法界であるから、時空を超越して居るのである。隨つて自他の過現未のことも空間のことも分明する筈であるが、吾人は常に識浪情波に動搖されて、心水澄澹ならざるが故に、自他の過現未のことが自己の心鏡に影現せないのである。

斯ることは小乘佛敎でも少し聞けば首肯することが出來るのである。彼の小乘敎で云ふ文字通りの六神通の如き（物質的の智識より合點することの出來ない連中には兎

に角として）識浪情波を沈静する人天有漏の正定を、二三年も實行したら、此の六神通の一二通が少しづゝ實現して來る。大乘佛教ではこんな事はつまらん事として貶ぞけるが、決して其の通力の現前する道理はないとは斷言せない。現に是等の小神通が小實現して、大層威張つて居る人々も二三存じて居る。請ふ一二年有漏定でもみつしり修して見られよ、必ず首肯できる。此の理は佛教の一小教理をも知れば明了する道理であるが、周易に於ても基督御當人に於ても兎に角これが多少實行できる迄であつて、何故に斯かる事が實行出來るかに至つては御存じないと信ずる。

三　通佛教の授記の説

通佛教の授記と云ふが、小乘教には授記の意もなく説もない。權大乘教にも授記の意は一分あるが、授記の説はない樣である。質に授記作佛の意も説も一乘圓頓の教にあるのであつて、且つ明かに之を宣説し玉へるは法華經である。さて淺近の未來記は周易も基督も能くする所である、況や佛の大定慧力を以てすれば一念淨信現前の衆生に對して未來成佛作祖することを、豫知豫言し玉ふことは何の不思議もないことである。

序に話して置くが、周易や基督の豫言等は或は種々の事を豫言するので（當りはづれは無論澤山ある）あつて、決して佛陀の佛弟子の未來成佛を豫言し玉ふのとは全然別であると云ふことを知らねばならぬ。授記は未來成佛の豫言であつて、決して種々雜多な事の未來記ではないのである。尤も佛陀にも種々雜多の事を豫言ましたる未來記も澤山あるが、佛弟子の未來成佛の記別と一混せぬようにせねばならぬ。

已上は佛陀の大定慧力を以て能く淨信の衆生の未來成佛を熟知して豫言し玉ふ所を云ふのであるが。其の内容の眞理は、人々性具の金剛法身（眞如、實相、佛性等の符牒は種々あれども同意なり）に始めて金剛成佛の新薰を下した時に與へらるゝ程度の授記を通授記と云ふのであり、其の新薰が本薰上に追々と成育して、八風妄雨等の爲めに夭折する憂なく、或年間内に、成佛の美果を結ぶこと佛眼以て照知し給ふ時に與へらるゝ授記を眞の別途の授記と云ふのである。

だから小乘や大權乘には未だ以て人々個々本覺の金剛法身あることを說かざる故に、始覺成佛の說なく授記なしと雖も、一乘圓頓の說法始まれば玆に始めて、授記作佛の說法もあり、且つ淨信の衆生も出來る筈である。依つて授記は狹義の未來成佛の豫言であつて、決して廣義の種々雜多の未來記でないと云ふことを知らねばならむ。

且つ未だ本覺の金剛法身を說かざる小乘敎の間は、たとへ佛敎と雖も、授記は無いのである。況んや周易や基督の豫言を以て佛敎の授記の說と同一視せんとするは斷々乎として出來ないのである。

四　禪より見たる授記

禪と云ひ敎と云ふ本より別のものではない。強て別を云へば禪は是れ佛心にして、敎は是れ佛語である。則ち敎は是れ禪の外觀にして禪は是れ敎の內容である。實は心と語は一如にして、內と外は不二の筈であるから、敎の授記と禪の授記と決して別な筈はない。が禪は只敎の道ひ得ない根底までも道破して示すと云ふに外ならむ事を知らねばならぬ。然れば其の經敎の未だ示し得ざる根底的授記とは何ぞと云へば左に二三分類して話さう。

一に佛陀成道して最初獅子吼して曰く、有情非情同時成道草木國土悉皆成佛と。又曰く天上天下唯我獨尊と。是れは之れ眞の總授記とも云ふべき活說法である。佛一代は只此の端的を萬機に對して橫說縱說し玉ふたに外ならんのである。佛一代の說法は只授記をお說きなされたのに外ならんのである。

次に法華經に一稱南無佛皆已成佛道等の聖說を總授記として示して居るのであるが、小衲は禪意よりして前者を總授記とし、後者を別授記中に入れるのである。則ち前者は根本の金剛法身を直示して即今是れ歸家穩坐底を知らしめたのであつて、後者は前者の一聲言下に體脫すること與はざる無邊の衆生中に於て、本具の金剛法身中に金剛の新薰を初めて薰下したるもので、則ち修證の眞最初なるものである。

次に道芽多少成育して佛祖の言敎を多少なりとも體信して、或は思佛三昧に入り、

或は題目三昧に入り、或は觀法三昧に入り、或は公案三昧に入り、或は兀坐三昧に入る底の時節は直に是れ作佛であると授記するのである。たとへ全く初心始學の一時半時の念佛も、打坐も直に辨成正覺（妙覺果滿の大定）であると授記するのである。

是等は皆他時異日眞個成等正覺に至ると云ふ時間的授記を離れぬ、空間的（即坐正覺）の授記である。通佛敎の授記の如きは、是れに反して、空間的の授記（敎者は是を知らずと雖）を離れる時間的の授記である。

次に個々元來觀自在を大悟し人々一坐の補陀山を大徹する時節を、眞の授記作佛の好時節と云ふのである。更に二三十年悟後の鍛錬を經過して、玆に眞個の唯佛與佛の境界と云はれるのである。更に〳〵高く眼を着くれば、尙是れ了事の凡夫と云ふべきのみで、更に生々世々無量の三昧を修し、無底の藍子に無邊の法財を盛り持ち來つて度生窮りなき時節あることを知らねばならん。

彼の通佛敎徒の如く授記とは唯時間的のことゝみ見る樣では、佛旨を去ること千萬里である。其れと同時に似非禪者の如く、授記を見ること空間的にのみ執せば、亦佛祖意を去ること十萬八千里だ。其の深意は開山の正法眼藏授記卷を拜すること一遍せられたい。斯る深大甚遠の大旨ある我が授記の大事と、彼の周易や基督の雜多なる未來記や、豫言妄想說と同一視せられてはたまらぬ。佛弟子は須らく佛敎の深旨を知り凡見一片の擔板漢に轉ぜられざらんことを望む。

二五、禪と因果說

問　我宗では柳は綠でよい、花は紅でよい、犬は犬、猫は猫で能い。人間は人間で法法位に住して居ればよいと言ひますが、さうすれば業相續なんぞと八ケ間布い說なぞを立つるにも當るまいと思ひます。否業相續しやうが、不相續であらふが關ばないやうに考へますが如何のものでありますか。（山口縣。不安生）

答　人々具足の那一物。天地に逼塞し古今に徹通す。名づくることを得ず。形どることを得ず。言詮を忘じ思慮を絕す。然りと雖ども、佛祖衆生を誘引するの手段を開き、